

京都市内遺跡試掘調査概報

平成12年度

2001年3月

京都市文化市民局



写真1 平安京左京北辺三坊五町跡出土金箔瓦



写真2 平安京左京一条三坊十一町跡(旧二条城跡)出土織部向付

ごあいさつ

京都は、世界に誇る数多くの歴史遺産に恵まれた大都市であります。市内の埋蔵文化財包蔵地には、年代ごとに幾層にもわたり積み重ねられた歴史の重みをもつ遺跡が数多く存在しております。

このような埋蔵文化財は、我が国の歴史や文化の成り立ちを知ることができる国民共有の貴重な財産であり、将来にわたって保存していかなければなりません。

近年、埋蔵文化財包蔵地内における土木工事等による開発行為は、これらの埋蔵文化財に少なからず影響を及ぼしており、先人が残した埋蔵文化財を引き継いだ私達は、その保存と開発との調整を適切に行い、これを後世に伝承していく責務があります。

さて、この度、平成12年度に本市が文化庁の国庫補助を得て実施した埋蔵文化財調査の結果をまとめた概要報告書を作成致しました。調査のうち、試掘調査は京都市埋蔵文化財調査センターが実施し、発掘調査及び立会調査は、財団法人京都市埋蔵文化財研究所へ委託し実施したものであります。各調査の実施に当たりまして、御理解と御協力を賜りました市民の皆様をはじめ、御指導と御助言を賜りました関係機関の皆様深く感謝申し上げますとともに、本報告書が京都の歴史を知るための一助として、お役に立てていただければ幸いに存じます。

平成13年3月

京都市文化市民局長

中野代志男

例 言

- 1 本書は、京都市が文化庁国庫補助を得て実施した平成12年度の京都市内遺跡試掘調査概要報告書である。
なお、本書は平成12年1月から12月までに実施した試掘調査の概要を報告している。
- 2 試掘調査を実施した総ての地区・所在地・調査日・調査概要については、試掘調査一覧表に掲載（34～37頁）している。
- 3 本文の執筆分担は、本文の末尾に記している。
- 4 本書に使用した地図は、本市の都市計画局発行の都市計画基本図（縮尺1/2,500）を複製して調整したものを掲載している。なお図版に使用した地図の縮尺は以下のとおりである。
図版1～13 1/8,000 図版14～19 1/10,000
- 5 本書に使用した土壌色名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帳』に準じた。
- 6 遺物整理にあたっては、丸山裕見子・鶴飼隆司・塩崎美保の協力を得た。
- 7 本書作成、調査実施にあたっては、京都市埋蔵文化財調査センターが担当し、次の機関の協力を得た。
京都市文化市民局文化部文化財保護課・（財）京都市埋蔵文化財研究所

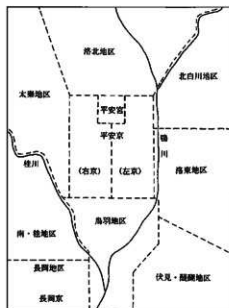


図1 調査地区割図

目 次

	頁		頁
I 試掘調査の概要	1	VI 史跡名勝嵐山	17
1 調査の概要	1	1 調査経過	17
2 各地区の調査概要	2	2 遺 構	17
II 平安宮中務省跡	5	3 まとめ	19
1 調査経過	5	VII 北野廃寺跡	20
2 遺 構	5	1 調査経過	20
2 遺 物	6	2 遺構・遺物	20
3 まとめ	7	3 まとめ	24
III 平安京左京六条三坊十六町跡 ...	8	VIII 中久世遺跡	25
1 調査経過	8	1 調査経過	25
2 遺 構	8	2 遺 構	25
3 遺 物	9	3 まとめ	26
4 まとめ	9	IX 長岡京跡	27
IV 平安京左京七条一坊二町跡	10	1 調査経過	27
1 調査経過	10	2 遺 構	27
2 遺構・遺物	11	3 まとめ	28
3 まとめ	12	X 岩倉幡枝町内範囲確認調査	30
V 平安京右京七条一坊十三町跡	13	1 調査経過	30
1 調査経過	13	2 遺構・遺物	32
2 遺 構	13	3 まとめ	33
3 遺 物	15	報告書抄録	38
4 まとめ	15		

圖 版 目 次

図版1 平安宮

図版2 左京北辺・一・二・三条 一・二坊

図版3 左京北辺・一・二・三条 三・四坊

図版4 左京 四・五・六条 一・二坊

図版5 左京 四・五・六条 三・四坊

図版6 左京 七・八・九条 一・二坊

図版7 左京 七・八・九条 三・四坊

図版8 右京北辺・一・二・三条 三・四坊

図版9 右京北辺 一・二・三条 一・二坊

図版10 右京 四・五・六条 三・四坊

図版11 右京 四・五・六条 一・二坊

図版12 右京 七・八・九条 三・四坊

図版13 右京 七・八・九条 一・二坊

図版14 花園宮ノ上町遺跡・平安京跡・史跡名勝嵐山・福西古墳群・門田町遺跡・長岡京跡

図版15 散布地・八幡古墳群・史跡御土居

図版16 白河街区跡・岡崎遺跡・平安京跡・法興院跡・北野遺跡・北野麁寺跡・北白川麁寺跡

図版17 伏見城跡・中臣遺跡・法性寺跡・中久世遺跡・大蔵遺跡

図版18 上鳥羽遺跡・上鳥羽城跡・鳥羽離宮跡・鳥羽遺跡・竹田城跡・下鳥羽遺跡

図版19 長岡京跡・羽束師志水町遺跡

挿 図 目 次

	頁		頁
図1 調査地区割図	例言	図20 土層断面図	18
図2 調査位置図	5	図21 出土遺物実測図	18
図3 トレンチ位置図	5	図22 調査位置図	20
図4 溝1部分西壁土層図	7	図23 土層断面図	20
図5 溝1出土遺物実測図	7	図24 トレンチ配置図	21
図6 調査位置図	8	図25 1トレンチ石列・溝2部分遺構および 土層断面図	22
図7 トレンチ位置図	8	図26 土壇3出土土器	22
図8 土壇1部分西壁土層図	9	図27 2トレンチ平面図	22
図9 土壇1出土土器実測図	9	図28 調査位置図	25
図10 調査位置図	10	図29 遺構平面・断面図	26
図11 トレンチ位置図	11	図30 調査位置図	27
図12 1トレンチ北壁土層図	11	図31 トレンチ位置図	28
図13 溝2出土土器実測図	12	図32 遺構分布図	29
図14 調査位置図	13	図33 竪穴住居跡2部分西壁土層図	29
図15 トレンチ配置図	14	図34 調査位置図	30
図16 1トレンチ西壁土層図	14	図35 トレンチ位置図	31
図17 土壇墓群出土遺物実測図	15	図36 1トレンチ・4トレンチ平面図	31
図18 調査位置図	17	図37 出土土器実測図	32
図19 トレンチ位置図	17		

表 目 次

	頁
表1 年次別試掘件数表	1
表2 土壇1出土土器器形別割合	9
表3 試掘調査一覧表	34~37

写真目次

	頁
写真1 平安京左京北辺三坊五町跡出土金箔瓦	巻頭図版
写真2 平安京左京一条三坊十一町跡(旧二条城跡)出土織部向付	巻頭図版
写真3 調査区全景(東から)	6
写真4 溝1完掘状況(南から)	6
写真5 1トレンチ溝2部分(南西から)	12
写真6 土壌墓群検出状況(1トレンチ北から)	13
写真7 建物3検出状況(2トレンチ西から)	13
写真8 遺構検出状況(北から)	19
写真9 石列1検出状況(東から)	23
写真10 溝5～8検出状況(北西から)	23
写真11 トレンチ全景(西から)	26
写真12 竪穴住居3検出状況(南から)	28
写真13 1トレンチ全景(西から)	32
写真14 2トレンチ全景(東から)	32
写真15 4トレンチ全景(北から)	33

I 試掘調査の概要

1 調査の概要

この概要報告書は、京都市埋蔵文化財調査センターが文化庁の国庫補助を受けて、2000年1月から12月までの1年間（平成11年度第4四半期と平成12年度第1～3四半期）に実施した試掘調査をまとめたものである。

2000年に実施した試掘調査は、埋蔵文化財包蔵地81件、史跡・名勝指定地3件の合わせて84件である、そのうち、平成11年度第4四半期に実施した試掘調査は20件（史跡御土居2件を含む）で、うち発掘調査を指導したもの2件、設計変更を指導したものが1件であった。

平成12年度第1～3四半期の試掘調査件数は64件（史跡名勝嵐山1件を含む）で、うち発掘調査7件、設計変更3件を指導し、さらに試掘調査後に立会調査を必要と指導したものが2件あった。なお、試掘調査を実施し重要遺構が検出された場合は、基本的に発掘調査を指導しているが、検出遺構の深さに対して計画建物の基礎が浅い場合や、基礎の設計変更等により遺構の保存が図られる場合は、遺構の保存が適切に行われているかどうかをチェックするため、工事中の立会調査を指導している。

次に、各地区ごとの試掘調査の実施状況と、その地域で行われた発掘調査をまとめてみたい。

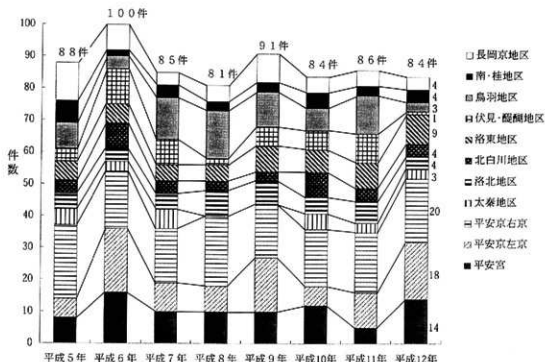


表1 年次別試掘調査実施件数表

2 各地区の調査概要（34頁～37頁の試掘調査一覧表・図版1～19参照）

【調査機関名の無いものは、原則として（財）京都市埋蔵文化財研究所実施分】

平安宮地区 平安宮跡では、大宿直・大蔵・采女町・朝堂院・左近衛府・梨本及び職御曹司・西院・中務省・裏松原・右馬寮などの推定地や、平安宮跡と重複する織豊期の聚楽第跡など、合計14件の試掘調査を実施した。

いずれも小規模な工事が多く、聚楽第の深い堀跡などで遺構確認が困難なものや、遺構が検出されても基礎が浅く保護層を十分確保できるために、発掘調査を指導したものは無い。

平安京左京地区 この地区では18件の試掘調査を行い、うち発掘調査7件、設計変更1件、工事中の立会調査1件を指導した。

京都御苑内の和風迎賓施設建設予定地で実施した発掘調査では、平安京跡の条坊遺構や室町後期の土壌・井戸・柱跡のほか、江戸時代の公家屋敷跡が検出され、公家の生活を彷彿とさせる遺構や生活関連遺物が大量に見つかっている。

関西文化財調査会による中京区油屋町89-1他の調査では、平安から鎌倉時代の柱穴や土壌・溝のほか、室町から江戸時代の土壌・井戸・柱穴などが検出されている。

古代文化調査会による中京区西洞院通錦小路下る蟻螂山町の発掘調査では、平安時代の土壌・柱穴、鎌倉から室町時代の土壌墓・井戸・柱穴などが検出されている。

下京区四条通慈屋町西入立売東町では、鎌倉から室町時代の柱穴・井戸・土壌などを検出した。特に調査区西側からは、一辺2m、深さ0.3～0.4mの方形倉跡を3箇所を確認し、14世紀後半～15世紀初頭の京都の町並みを復元する上で重要な発見となった。

下京区西新屋敷中之町103-2では、弥生前期の遺物を包含する流路を検出した。関西文化財調査会による南区東九条南山王町1-1の発掘調査では、鎌倉時代の井戸・土壌、平安から鎌倉時代の溝1条が検出されている。また、（財）古代学協会による南区西九条院町21の調査では、平安時代後期の建物地盤が検出されている。

平安京右京地区 この地区では、20件の試掘調査を行い、うち発掘調査1件、設計変更1件を指導した。

この地区で実施された発掘調査の内、中京区西ノ京円町55-1では、平安時代の建物跡や井戸跡を検出するとともに、敷地西端で御土居の西辺張出部分を約30mにわたって検出した。

御池通拡幅工事に伴う中京区西ノ京船塚町地内の調査では、三条坊門小路北側溝を確認し、役所名である「内舎人^{うちねりど}所」と書かれた平安中期の緑釉陶器碗が出土している。

中京区西ノ京中御門東町49では、平安前期後半頃の井戸・土壌を検出し、小規模な建物が中期頃まで存続することが明らかとなった。また、下層からは2万5千年前の始良丹沢火山灰（AT）の堆積層が見つかっている。

区画整理事業内の中京区西ノ京小倉町からは、平安時代前期の建物跡が検出されたが、ここは百花亭とも呼ばれる9世紀後半の藤原^{ふじわら}良相の西三条第に比定されている場所である。

中京区西ノ京東中合町1の京都市立西京商業高校では、北グランド内の発掘調査で、東西15m、

南北40mの園池や泉（木製人形が出土）のほか、幾つかの建物跡が検出された。出土遺物に「齋宮」と書かれた墨書土器があり、9世紀末～10世紀前半の齋宮に関係するとみられる邸宅と考えられ、重要な調査成果として注目される。

太秦地区 この地区では3件の試掘調査を行い、うち1件を発掘調査指導した。

また、学術調査として、乾山窯に比定される法蔵寺境内（右京区鳴滝泉谷町7-5）で、法蔵寺と立命館大学文学部の協力により遺構確認調査が行われ、有力な遺構は検出できなかったが、土中から窯関連の遺物が採集された。

洛北地区 この地区では、4件の試掘調査を行い、うち1件を設計変更するように指導した。

この地区で行われた発掘調査では、北区上賀茂土門町の植物園北遺跡から、古墳時代の方形竪穴住居跡を検出し、把手付須恵器椀等が出土している。

北区紫野雲林院町83の雲林院跡では、京都府京都文化博物館が発掘調査を担当し、9世紀を中心とした園池跡・掘立柱建物・井戸・土器溜りなどの遺構が検出された。園池北西岸で見つかった掘立柱建物は、『類聚回史』に記載されている釣殿跡とも考えられ、平安時代の土師器・須恵器・緑釉陶器のほか、土馬・獣足香炉・水注・中国産の白磁などが出土しており、淳和天皇の離宮紫野院か雲林院の遺構の可能性がある。

その他、放火で焼失した左京区大原草生町の寂光院本堂基壇下の調査も行われた。

北白川地区 この地区では4件の試掘調査を行い、発掘調査1件、設計変更1件を指導した。

左京区北白川追分町の京都大学北部構内遺跡では、京都大学埋蔵文化財研究センターが発掘調査を実施し、縄文晩期から弥生前期の遺物包含層、平安時代の埋納遺構などを検出し、この地域では珍しい弥生前期末の水田遺構を検出している。

洛東地区 この地区では9件の試掘調査を実施したが、顕著な遺構・遺物は検出していない。

山科本願寺跡（山科区西野左義長町19-1ほか）の発掘調査では、溝に区画された建物跡などを検出し、石組の暗渠排水も確認している。

中臣遺跡（山科区勤修寺東栗栖野町の市営住宅建替事業）からは、5世紀後半から6世紀初頭の高墳9基が、さらに7世紀初頭から8世紀までの竪穴住居や掘立柱建物のほか、9世紀の大型掘立柱建物1棟も検出された。遺物については、朝鮮半島百濟地域産の陶質土器甕のほか、後期旧石器時代のサヌカイト製翼状剥片も3点出土したことは特筆すべきである。また、同じ中臣遺跡（山科区勤修寺東栗栖野町地内の道路改築工事）からは、縄文早期の落とし穴1基、弥生時代の方形周溝墓1基、古墳時代の竪穴住居跡3棟が検出された。

東山区正面通大和路東入茶屋町地内公園整備予定地では、方広寺大仏殿基壇が確認され、基壇上からは2尺方形の花崗岩製敷石や、柱間寸法が7.8mもある礎石抜き取り痕などを検出した。さらに一辺15mの大仏の八角台座部分及び基壇南辺の階段と基壇を形成していた羽目石・地覆石なども確認された結果、基壇は南北約105m、東西約70m（建物は南北約90m、東西約55m）と判明した。さらに基壇内側で秀吉創建当初の地覆石とみられる石列も発見された。

伏見・醍醐地区 この地区では、1件のみ試掘調査を行った。

発掘調査は、伏見区小栗栖北谷町22・32ほかの法琳寺跡で、橘女子大学の学術調査として実施された。法琳寺跡は奈良時代創建とみられる寺院で、今回、伽藍堂宇の確認のほか、梅原末治がかつて調査した、境内に近い7条のロストルを持つ平安時代平楽跡を再調査して埋め戻されたが、調査では寺院に関する明確な遺構は検出できなかった。

鳥羽地区 この地区では、3件の試掘調査を行ったが、発掘調査は指導していない。

この地区で実施された発掘調査は、鳥羽離宮跡（伏見区中島秋ノ山町の側道工事予定地）で、保延2年（1136）に鳥羽上皇により、宇治の平等院を模して造作したとされる北殿の勝光明院阿弥陀堂の基壇跡（地乗）が検出され、平等院鳳凰堂を凌ぐ規模であったことが判明すると共に、池の中島の構築方法も明らかになった。

伏見区深草池ノ内町13の西飯食町遺跡では、上層（室町前半～後半頃）と下層（平安中期～鎌倉時代）から柱穴・井戸・溝・土壇などを伴う集落跡が検出されている。また焼土塊など、平安中期から中世、さらには近世に続く土師器生産に関わる遺構・遺物が見つかり、12世紀初めの藤原忠実の『執政所鈔』に記載された「深草土器」を裏付けるものとして注目される。

伏見区横大路下三栖辻堂町地内の道路建設予定場所の下三栖遺跡では、奈良時代の集落跡や、古墳時代後期の竪穴住居2棟、木棺墓が見つかった。

南・桂地区 この地区では、4件の試掘調査を行い、うち1件を設計変更するよう指導した。

大藪遺跡で実施した発掘調査（東西道路建設に伴う南区久世大藪町）では、弥生時代後期の竪穴住居跡1棟と、鎌倉から室町時代にかけての中世建物や井戸・土壇のほか園池なども検出され、中世の土壇からは鏡の鋳型8枚がまとめて出土している。また、平安後期の井戸と考えられる土壇もみつかった。

長岡地区 この地区では4件の試掘調査を行い、一部で遺構が検出されたため、工事中の立会調査を指導した。

この地区で行われた発掘調査は、南区久世殿城町338と向日市森本町戌亥11ほかの市境界にまたがる民間本社ビル建設予定地で、(財)古代学協会と(財)向日市埋蔵文化財センターが行った長岡京跡（左京北城）の調査がある。

この調査では、正殿とみられる南北双殿形式の礎石併用掘立柱建物2棟、その西側から南北棟の礎石建物2棟や蛇行溝（南北）が検出された。また、敷地西半の向日市側からも、掘立柱建物跡7棟と礎石建物跡1棟、井戸などが検出され、さらに敷地南西で見つかった廃棄土壇からは、墨書土器や木棺などの文字資料を含む遺物が大量に出土した。廃棄土壇からの出土遺物には「東院」と墨書された須恵器や、役所名・人名・年号などを記した木簡が出土したことから、検出された遺構は、平安京遷都に伴って長岡京内裏を解体して移すために、延暦12年（793）正月21日に桓武天皇が内裏の代替え施設として遷った離宮「東院」の跡とほぼ断定された。さらに、検出された建物は、桑坊邸宅範囲を超えて建てられていることから、二時期にわたって造作され、離宮の規模は四町ないし六町（約10万平方メートル）に及ぶと考えられている。

（梶川敏夫）

II 平安宮中務省跡 No. 27

1 調査経過

調査地は、上京区浄福寺通丸太町下る主税町1053で、都芳通と浄福寺通の交差点南西角地にあたる(図2・図3)。当該地は、天皇に近侍し秘書的な役割を持つ官職であり、詔勅の作製や総務を取り扱う中務省の政庁域に比定されている¹⁾(図版1-27)。

この場所に、建築面積80㎡の個人住宅建設が計画されたため、中務省に関連する遺構の残存状況の確認を目的に、平成12年7月19日に試掘調査を行った。

調査では、防空壕や近現代の擾乱が著しかったものの、平安時代の瓦片を多く含む南北溝1条、土壌1基を検出することができた。

2 遺構

調査区は、土地が狭く廃土の置き場所も限られることから、敷地中央部に設定した。敷地西端で掘削

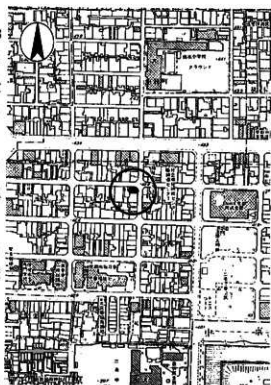


図2 調査位置図 (1:5,000)

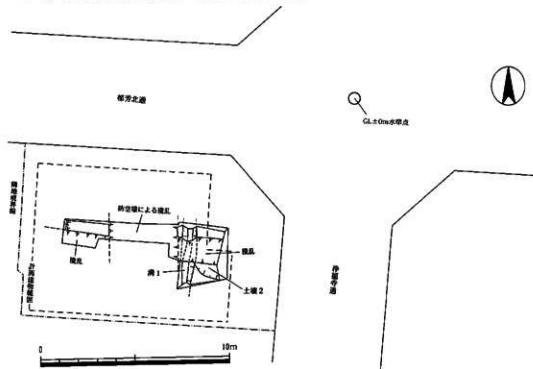


図3 トレンチ位置図 (1:200)

を開始すると、近世後半以後に掘削されたとみられる礫を大量に充填した基礎構造を検出したため、北側に調査区を移動した。しかし、敷地中央部では防空壕によって、敷地東側では前述の礫を充填した基礎構造の延長部分により大規模に遺構面が破壊されていた。わずかに、調査区北東部分の地表下30cmで平安時代の遺物を含む整地層を検出し、その整地層上面に溝状の遺構を検出したため、南側に調査区の拡張をおこなった。

溝1 幅70cm、深さ43cmの素掘りの南北溝で、U字形の断面をしている。この溝は、にぶい黄褐色泥砂の整地層上面から掘り込まれており、延長3.4mにわたって検出した。埋土は暗褐色泥砂で、大量の瓦片が含まれていた。検出された瓦片は小片が多く、建物の倒壊や火災によって屋根から直接当溝に入ったとは考えにくく、二次的に埋められたものと考えられる。

土壌2 北側は攪乱により破壊され、東側は調査区外に延びる、深さ10cm程度の浅い掘り鉢状のくぼみで、瓦片等が大量に含まれていた。東西1.2m、南北0.8mにわたって検出した。こちらの瓦も小片が多く、塵芥などを廃棄するための土壌と考えられる。

3 遺物

出土した遺物には、平瓦、丸瓦、軒丸瓦があり、コンテナで2箱分出している。溝1からは、軒丸瓦4点が出土したが、図化したのは2点である。土壌2では軒先瓦は認められなかった。

単弁蓮華文軒丸瓦 (図5-1) 讃岐系と考えられる軒丸瓦²⁾で、直径2.4cmの中房に大型の蓮子を1個だけ配している。蓮弁は突線でご表現し、内区と外区を区切る界線も太い。珠文は直径8.5mm、高さ3.5mmである。色調は淡橙色で、焼成は甘く、丸瓦の接合に上下から大量の粘土を使用している。中務省調査12の11世紀代に埋没した溝SD4³⁾や、内裏跡調査4の10世紀後半頃の火災の後始末土壌SK25⁴⁾などから同文瓦が出土している。

複弁蓮華文軒丸瓦 (図5-2) 中房は平坦で、蓮子は1+6と考えられ、蓮弁及び間弁は細く浅い凸線である。珠文は二重の界線内を粗に巡り、中心に上下方向の范割れが認められる。色は濃灰色で、焼成は良好である。栗柄野窯跡で同文ないし同範の軒丸瓦⁵⁾が出土している他、



写真3 調査区全景 (東から)



写真4 溝1完掘状況 (南から)

消費地では高陽院の6次調査土壌SK 4⁴⁴や、下鴨神社境内⁷⁾等で出土している。平安時代後期の瓦である。

CL&Om

4 まとめ

調査事例の豊富な中務省跡ではあるが、政庁域に関しては、今回検出した南北溝の延長部分で調査は行われておらず、その性格や規模は今後の調査の進展をまたねばならない。平安時代前期以後、すぐに形骸化したとみられる中務省内で検出されたこの南北溝は、出土した瓦から判断すると、平安時代後期以後に埋没したことになる。周辺の事例も含めて、形骸化後の土地利用状況の解明に役立つ一資料になると考える。

(馬瀬智光)

註

- 1) 辻 裕司 「中務省跡」『平安宮Ⅰ』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1995年 76～92頁)を参照。
- 2) 高松市歴史資料館編 「第11回特別展 讃岐の古瓦展」(高松市歴史資料館 1996年)所収の道音寺出土八素素弁蓮華文軒丸瓦DOI08は同文であり、その境内付近に瓦窯跡が存在する。
- 3) 網 伸也 「平安宮中務省」『平安京跡発掘調査概報 平成2年度』(京都市文化観光局 1991年 1～10頁) 図版7・図版17の9が同文瓦。
- 4) 九川義広・鈴木久男 「平安宮内裏(1)」『平安京跡発掘調査概報 昭和62年度』(京都市文化観光局・(財)京都市埋蔵文化財研究所 1988年 29～46頁) 図版22・図版30の67が同文瓦。
- 5) 史跡栗栖野瓦窯跡の範囲確認調査及び、木村捷三郎氏が栗栖野瓦窯跡で収集した瓦に同文・同范のものがある。
石井 望 「史跡栗栖野瓦窯跡」『平安京跡発掘調査概要 1979年度』(京都市文化観光局・(財)京都市埋蔵文化財研究所 1980年 1～6頁)の図3の15
(財)京都市埋蔵文化財研究所編 「木村捷三郎収集瓦図録」1996年の50, 51
- 6) 網 伸也・岡田文男 「平安京左京二条二坊」『平安京跡発掘調査概報 平成元年度』(京都市文化観光局 1990年 25～36頁)の図版14の5は同范と考えられる。
- 7) 註5) 文献の660, 661と同文。

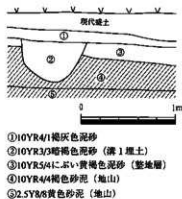


図4 溝1部分西壁土層図(1:40)

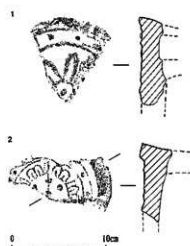


図5 溝1出土遺物実測図(1:4)

Ⅲ 平安京左京六条三坊十六町跡 No. 40

1 調査経過

調査地は、下京区烏丸通松原下る五条烏丸町404他で、平安時代末期、当該地には六条、高倉、安徳の各天皇の御所である「五条東洞院内裏」が存在した。この場所に共同住宅の建設が計画されたため、これら内裏跡の検出を目的とした試掘調査を平成12年4月12日に行った。

調査の結果、室町時代の土壌を5基検出し、その内の1基には大量の土師器皿が埋納されていたため、ここに報告する。

2 遺構

約460㎡ある既存地下室を避け、計画建物の東端部分に南北方向の調査区を設定した。地山は褐色色砂礫層で、残りの良い部分では現地表下約90cmで確

認できる。地山直上まで近世の整地土が認められるため、検出した室町時代の土壌はいずれも地山面で確認した。

土壌1 地表下90cmで検出した。深さは40cmある。遺構の大部分は近世の石組井戸により破壊されていた。埋土は黒褐色泥砂であり、土壌内には大量の土師器皿が含まれていた。土師器皿の大半は、2、3枚を一組として、重ね置きされていた

が、各組が、規則正しく土壌内に配列されているわけではなく、全てが重ねられていたわけでもないため、祭祀ないし饗宴後にまとめて廃棄されたのであろう。

土壌2～5 残存長は1.2m～2mであり、いずれも地山上で検出した。遺物は少なく、しかも小片だが、室町時代とみられる。

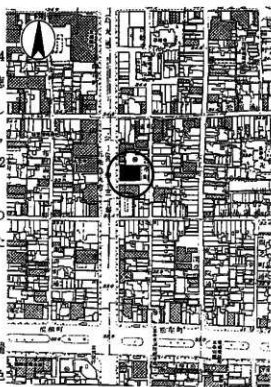


図6 調査位置図 (1:5,000)

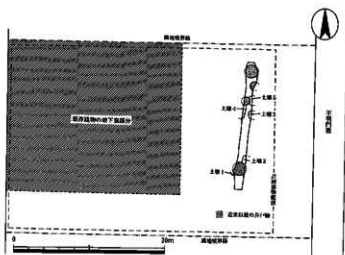


図7 トレンチ位置図 (1:500)

3 遺物

土壌1からは、土師器の口縁部片が965点出土した。そのうち、口径計測可能な557片を5種類の器形に分類した。

赤色系皿Nh (2) 底部を少し押し上げ、体部下半を強く指押さえた器形で、25点、4%を占める。

赤色系皿N小 (3, 4) 底部平底で、強く指押さえられた体部下半が内側に屈曲する器形で、137点、25%を占めており、口径は7.2cm~8.6cmに集中している。

赤色系皿N大 (5~8) 器形は皿Nと同じだが、口径が9.4cm~10.4cmに集中し275点、49%に達する。

白色系皿Sh (1) いわゆる「へそ皿」。16点、3%を占める。

白色系皿S (9) 深碗形で、口径11~12cmの範囲に多く分布し、48点、9%を占める。

白色系皿S大 (10, 11) 口径、器高とも皿Sより増大した器形で、口径は12.8~13.2cmに集中する。56点、10%を占めている。

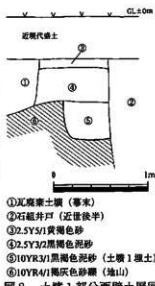


図8 土壌1部分西壁土層図 (1:40)

4 まとめ

土壌1出土の土師器皿は、小森・上村編年のⅧ期中~新段階(14世紀末~15世紀前半)に相当し、「五条東洞院内裏」とは直接結びつかず、中世下京の様相を示すものである。また、近世の南北に連続する井戸群は、烏丸小路に面した町屋の短冊型地割りを示すものであろう。

(馬瀬智光)

註

1) 山田邦和 「左京全町の概要」「平安京概要」((財)古代学協会・古代学研究所編 1994年 187~310頁)の278~279頁を参照。

2) 小森俊寛・上村憲章 「京都の都市遺跡から出土する土師の編年的研究」『研究紀要』第3号((財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年 187~271頁)を参照。

3) 註2) 文献の219~221頁、表5、表6、図2~図13を参照。

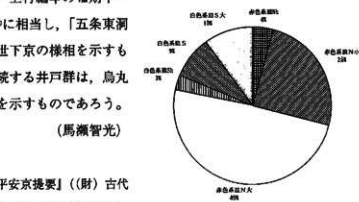


表2 土壌1出土土師器器形別割合

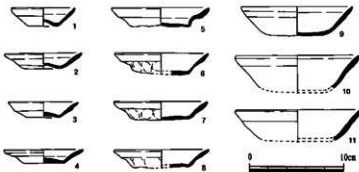


図9 土壌1出土土師器実測図 (1:4)

Ⅳ 平安京左京七条一坊二町跡 No.41

1 調査経過

調査地は下京区西新屋敷之上町128番地で中央卸売市場第一市場の東方、元島原遊郭街の中に位置している。周辺には今なお昔をしのばせる風情が残り、調査地の北側を東西に通る道は「道筋」と呼ばれ、この道を東に行けば高原の正門である島原大門がある。この門は高麗門形式によって慶応3年(1867)に再建されたものであるが、高原の由緒を伝える貴重な遺構として京都市の登録文化財に登録されている。また、道筋を西に行けば揚屋建築として唯一の遺構であり寛永年間(1624-44)の建築とされる国の重要文化財「角屋」が一般に公開されている。当該地は現在、旅館の敷地となっているが、大門に入って「角屋」へ行くまでの道筋に面した土地であることから、元は「角屋」のような遊郭のあった所と考えられる。

今回の試掘調査は旅館の増築工事に伴って平成12年6月21日に実施したものである。平安京の条坊復元によれば調査地点は左京七条一坊二町の北東隅と坊城小路を挟んで東側の七町にまたがる所に位置している。既述のように当該地周辺はかつて島原遊郭であったため、現在も木造の民家の密集する所であり、過去に発掘調査や試掘調査の例もほとんど無く、埋蔵文化財の情報の希薄な地域である。平安時代における調査地を含む七条一坊二町の利用については不明であるが、南の三・四町は公的な迎賓施設である東鴻臚館の推定地である。この地区においてもほとんど調査事例が無いが、朱雀大路を挟んだ対称の西鴻臚館推定地である中央卸売市場第一市場内の調査では西鴻臚館に関連する区画溝等が見つかり大量の瓦類が出土している。



図10 調査位置図(1:5,000)

調査は旅館の計画が
 L字形の配置のため、
 その計画に合わせてま
 ず東西トレンチ（1ト
 レンチ 東西15m、幅
 1m）を設定し、その
 後、南北の2トレンチ
 （南北2.5m、幅1m）
 を設けたが旧建物の地
 下室による擾乱が激し
 いため、トレンチの位
 置を少しずらして2本
 目の南北トレンチ（3
 トレンチ 南北7m、
 幅1m）を設けた。

東西方向の1トレン
 チは、平安京の南北街
 路である坊城小路を跨

ぐ位置にあることから側溝などの検出が予想された。調査の結果、地表下1.4mほどの深さで平安時代後期の南北溝を2本と小ピットを認めた。他の南北方向の2・3トレンチでは近現代の擾乱が多く、ともに顕著な遺構は認められなかった。

2 遺構・遺物

調査地内には、1.3mほどの厚さの現代盛土層が認められ、その下層には床土状の灰色粘土が堆積する。遺構の検出面は、この床上下であるが、その堆積状況は敷地の東半と西半では異なっている。おもに南北溝や小ピットを検出した1トレンチの東半部の検出面は粘りのある灰褐色粘質土で地山と考えられる。これに対して1トレンチの西半部以西にはこの粘質土は認められず、代わりに雑混じりの褐色系の砂泥が検出された。この褐色砂泥には土師器片や瓦（剣頭文軒平瓦破片）が含まれ、南北トレンチである3トレンチの北半部でもこの整地層が認められ、断ち割りを兼ねて深く掘り下げて断面観察を行った

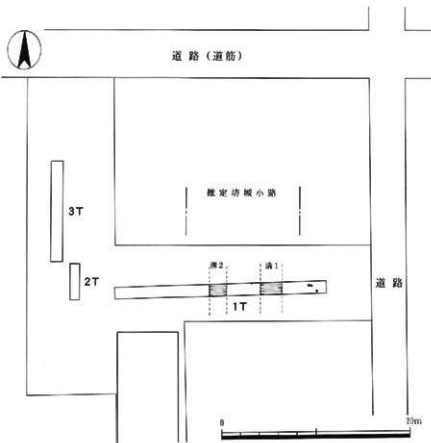
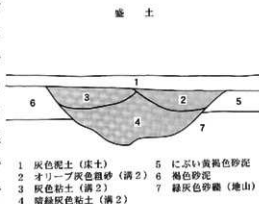


図11 トレンチ位置図 (1:400)



- | | |
|----------------|-------------|
| 1 灰色泥土（床土） | 5 にぶい黄褐色砂泥 |
| 2 オリーブ灰色粗砂（溝2） | 6 褐色砂泥 |
| 3 灰色粘土（溝2） | 7 緑灰色砂礫（地山） |
| 4 暗緑灰色粘土（溝2） | |

図12 1トレンチ北壁土層図 (1:40)

ところ整地の下層には、灰色砂による氾濫堆積が認められ、地表下1.9mで地山の砂礫層に達した。灰色砂層には土師器の細片が含まれていたが、その時代については不明であった。

検出した主な遺構は既述のように南北溝が2本である。2本の溝は6m離れ、共に幅2m、深さ0.5m、その断面形はU字形を呈し、よく似た形の溝であり同じ時期の溝と考えられる。西側の溝の埋土である暗緑灰色粘土からは、平安時代後期の土器類が出土した。図13に示した土器類は、この溝からの出土品である。土師器皿を主体とするが瓦器碗なども出土している。

3 まとめ

1トレンチで発見した2本の南北溝は位置的には坊城小路の東西両側溝に該当する。しかし二つの溝の中心距離が5mしかなく、溝の間を小路とした場合、路面幅が5mと通常の小路幅である6.9mより狭くなる。また溝から出土している土器などが平安時代後期以降であること、溝の西側一帯が平安時代後期以降に整地され、それ以前は砂の堆積する氾濫原のような土地であったことなどを考えると、当該地は平安時代後期以降に開発され、溝などもその開発に合わせて開削されたのではないかと考えられる。

調査地の1町北の七条一坊一町では、平安時代末期に普正院という寺があり安元二年(1176)には多寶塔の供養記録もある。寺の沿革については不明であるが、このような寺の造営に絡んでの周辺整備なども考えられる。

(長谷川行孝)



写真5 1トレンチ溝2部分(南西から)

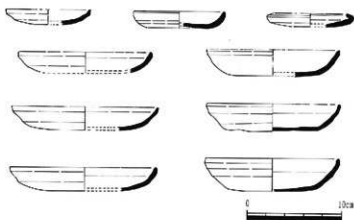


図13 溝2出土土器実測図(1:4)

V 平安京右京七条一坊十三町跡（西市跡） No.54

1 調査経過

調査地は下京区西七条北東野町18-1および18-2で、七条通に面した南北に長い土地である。平安京の復元条坊においては西市の東側外町にあつている。

94年度には七条通を挟んだ南向かいの敷地において試掘調査を実施しており、GL-30cmという浅い位置で遺構面に達している⁹⁾。ここで店舗建設が行われることとなり、平成12年10月4日、これに先立つ試掘調査を実施した。調査当時の地形は、敷地の北半と南半で50cmほどの段差をもって北側が高くなっていることが注意された。

2 遺構

調査にあたっては、まず建物方向に従って南北方向のトレンチを設定し（1トレンチ）、その後、1トレンチで検出した遺構の広がりを確認するため、

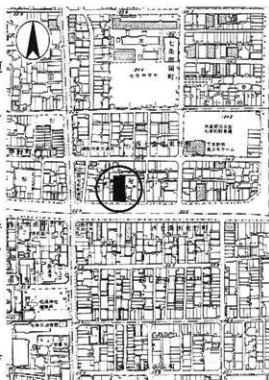


図14 調査位置図（1：5,000）



写真6 土壌層群検出状況（1トレンチ北から）



写真7 建物3検出状況（2トレンチ西から）

東西方向に2・3の両トレンチを掘削した。

層序 当該地の層序はいずれの地点においても極めて単純である。15～25cmの表土の直下には、遺物を含んだ整地土層がおよそ35cmの厚さであり、その下は遺構面である地山となる。整地土には須恵器、土師器のほか緑釉陶器、瓦、瓦器など様々な種類の遺物が含まれる。遺物には平安時代に遡るものも少なくないが、染付片なども混在しており、この整地が近世の作業であることが知られる。

地山については、1トレンチ南端から15～16mの辺りまでは固く締まったオリブ黒色泥砂であるのに対し、以北は礫が多く混じった黒色泥砂で、その土質を異にしている。また、その標高は七条通路面北端を0とした時、1トレンチ南端から18m付近までは+1～8cmでおおよそ平坦であるが、それより北は+20～50cmと高くなっている。近世の整地土がこれを覆っていることから、このレベル差は近世には既にあったことが分かる。

土壌墓群 1トレンチ北端および2トレンチにおいて、少なくとも4基以上を検出した。1トレンチ内で検出した土壌墓1・2の所見によれば、直径2m程度の円形を呈すると思われ、その埋土上面中央には20cm前後の河原石の集石がなされている。東への広がりを確認するため設定した2トレンチでは、地山面が全く認められず全面で土壌墓1・2と同様の遺構埋土が検出され、おそらくは敷地境界を越えて広がるものと考えられる。埋土の類似から、2トレンチ内の検出遺構も稠密に切り合った土壌墓群と考えられたが、その具体的な切り合い関係については、時間の関係上、検討を諦めざるを得なかった。2トレンチでは集石はなかったが、表面清掃中から多くの土器片が埋土中に認められ、調査の最後にサンプルとして一部を取り上げた。

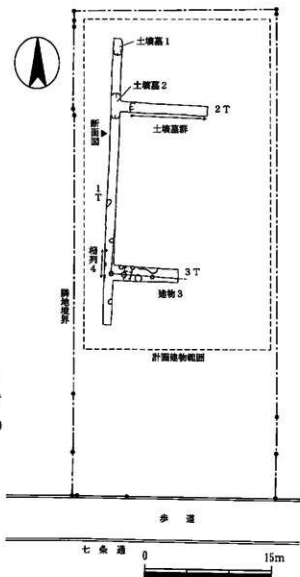


図15 トレンチ位置図 (1:300)

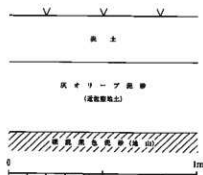


図16 1トレンチ西壁土層図 (1:20)

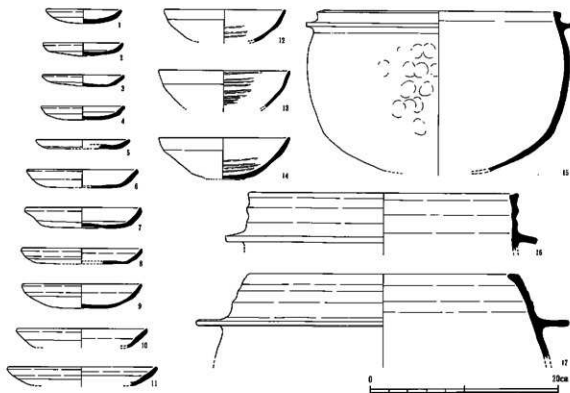


図17 土墳墓群出土遺物実測図 (1:4)

建物3 1トレンチから3トレンチにかけて2基の柱穴を検出したもので、西側の柱穴には根固めの石も見られることから建物になると思われる。柱間は3.0mを測る。

櫓列4 建物3の西で、南北方向に小柱穴が3つ並ぶ。北でやや東にふるのは、建物3と同様である。

以上の遺構の他、土壇4基、溝1条、柱穴4基が認められた。いずれも地山面での検出である。

3 遺物

図17に示した遺物は、2トレンチで検出した土墳墓群を部分的に3箇所ほど掘削してサンプリングしたものである。土師器皿(1~11)、瓦器碗(12~14)、土師質釜(15)、瓦質釜(16・17)を図示したが、他に瓦質鍋なども出土している。土師器皿の中には、灯明皿として使われた痕跡を残す物がある。いずれも13世紀後半頃の鎌倉時代のもものと推定される。

4 まとめ

今回の調査の結果、建物予定地の北寄りで鎌倉時代の土墳墓群、南寄りで建物や櫓を検出した。建物や櫓の時代は不明であるものの、北と南で土地の用途が明瞭に異なり、それが地山の土質の違いにほぼ一致しているように見えるのは興味深い。おおむね同じ位置で地山の標高も変わっていることからすれば、もともと別の敷地であったにすぎないのかもしれないが、いずれにしても中世京都における土地利用のあり方を考える上での一資料となりうるだろう。また、今回は平安時代に遡る遺構は見出せなかったが、近世整地土層から当該期の遺物も多数出土していることか

らすれば、平安期にも周辺で一定程度の活動が行われていたことが窺われる。特に、整地土層の包含遺物にしては緑釉陶器の割合が多いのは、土器が西市の専売品であったことにかかわるのかもしれない。

なお、当該地で検出した遺構については、事業主が建物の基礎深を設計変更され、現状保存が図られた。

(堀 大輔)

註

- 1) 京都市文化市民局「京都市内遺跡試掘調査概報 平成7年度」1996年 29頁
- 2) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号
(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年)、中世土器研究会『概説 中世の土器・陶磁器』1995年

VI 史跡名勝嵐山 No.63

1 調査経過

調査地は、観光地として著名な渡月橋の北西およそ150m、右京区嵯峨天龍寺芒ノ馬場町3-39である。周辺の調査では、昭和63年に平安前期の園池を検出しており、また、平成4年には鎌倉及び室町時代の濠状遺構や石積み地盤を確認している³⁾。今回、当該地で住宅の新築が計画されたが、史跡及び名勝指定地内であるため、文化財保護課と埋蔵文化財調査センターとで、平成12年5月10日、試掘調査を行った。



図18 調査位置図 (1:5,000)

2 遺構

敷地は南東へ向かって下がる緩斜面上に位置し、現状では水平を確保するため前面(南面)道路から最大で1.5mほどの盛土をしていた。計画では敷地東

半分を道路面まで切り下げる予定であったため、ここに南北方向のトレンチを設定して調査を行った。

敷地は住宅地であったため際立った攪乱もなく、層序は概ね単純である。厚い盛土を除去すると、前面道路面とほぼ同じレベルで、中世の遺物を包含する黒褐色砂泥層が現れる。比較的締まっているため整地土と思われるが、その上面での遺構検出はできなかった。遺構は、その直下のぶい

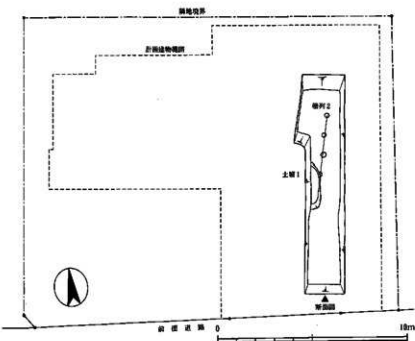


図19 トレンチ位置図 (1:200)

黄褐色泥砂層上で、土壌1基と横列と思われる柱穴4つを検出した。この遺構面は、トレンチ内

北半においては遺路面+15cmでほぼ水平であるが、南半は緩く南へ下がっており、トレンチ南端で-24cmとなる。検出した遺構はいずれも北半の水平面上にある。また、遺構面は若干ながら赤変しており、付近で火災のあったことを窺わせる。

構列 2 4つの柱穴は南北に1.05mの等間隔で並ぶ。可能な範囲でトレンチを拡幅して並びを探したが、北、東、西ともにこれ以上広がらないようである。南は次の並び位置が土壌に切られているため確認できないが、その次の位置には柱穴は認められない。東西方向の柱間が広い建物跡ということも考えられるが、柱穴自体も大きなものではなく、構列と考えておきたい。

土壌 1 土壌は柱穴を切って成立しており、長軸2.5m、短軸1.0ないし1.5mほどの隅丸方形になると思われる。検出面からの深さはおおよそ20cmを測る。中からは土師器皿ばかり遺物袋で5袋分ほど、重量にしておおよそ7.4kgが出土した。土師皿1枚を仮に150gとすると、ほぼ50枚分ということになる。実際には小型の皿も混じっており、また掘り上げたのは遺構の半分ほどと思われることから、全体では100枚を下らない量になると考える。土師器は完形に近いものも少なくないが、出土の状況は整然と埋められたというより、廃棄されたものという印象が強い。土師の年代は16世紀前葉頃にまよまっている³⁾。

遺構・遺物は以上がほぼ全てであるが、重機掘削中に出土したものに、瓦当内区に「天」？の字を表し、外区に珠文を巡らせた軒丸瓦の破片がある。近辺での出土例から⁴⁾、瓦当全体では時計回りに「天龍寺」となるものと思われる。天龍寺は暦応2（1339）年に造営が始まり、興国6

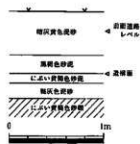


図20 土層断面図 (1:40)

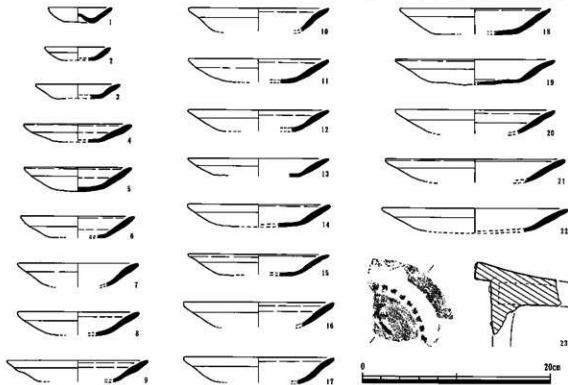


図21 出土遺物実測図 (1:4)

(貞和元、1345)年に落成しているが、山崎信二氏はこれをその創建瓦と位置づけている。

3 まとめ

記録によれば、室町時代における当該地一帯は度々火災に見舞われている。延文3(正平13・1358)年に天龍寺が山門と雲居庵を除いて灰燼に帰し、康安元(正平16・1361)年には臨川寺で火災があった。貞治6(正平22・1367)年には修造なった天龍寺が再び焼亡、応仁の乱勃発の翌年にあつては、天龍寺・臨川寺ともに炎上している。乱後の文明14(1482)年には寺院の跡地で耕作や放牧が行われていたというから、相当に荒廃していたものらしい⁹⁾。今回検出した遺構は、これらの記事のさらに後のものと思われるが、横出遺構面に火災痕跡があったことは、戦乱の時代を彷彿とさせる調査結果と言える。



写真8 遺構検出状況(北から)

(堀 大輔)

註

- 1) 木下保明「史跡名勝嵐山」『昭和63年度京都市埋蔵文化財調査概要』((財)京都市埋蔵文化財研究所 1993年)
- 2) 久世康博「史跡名勝嵐山」『平成4年度京都市埋蔵文化財調査概要』((財)京都市埋蔵文化財研究所 1995年)
- 3) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号((財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年)、中世土器研究会『概説 中世の土器・陶磁器』1995年
- 4) 吉川義彦ほか『臨川寺旧境内遺跡発掘調査報告』京都市埋蔵文化財研究所調査報告Ⅳ((財)京都市埋蔵文化財研究所 1978年)、加納敬二ほか『京都嵯峨野の遺跡～広域立会調査による遺跡調査報告』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊(財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1997年)など。
- 5) 山崎信二『中世瓦の研究』、奈良国立文化財研究所学報第59冊、2000年
- 6) 京都市編『史料京都の歴史』14、右京区、平凡社、1994年

Ⅶ 北野廃寺跡 No.16

1 調査経過

調査を行ったのは、北区小松原南町43の学校グラウンド内である。当該地は北山背最古の寺院である北野廃寺の寺域西縁部に推定されているが、ここに体育関係施設の新築が計画されたため、建物が予定されている2,052㎡を対象に、平成12年3月8～9日の2日間、試掘調査を実施した。現況はグラウンドとして水平に造成されているが、周辺の状況から本来南へ向かって緩やかに下がる地形であったと思われる、したがって北にいくほど遺構面が浅くなることが予想された。周辺における既往の調査では、京福電鉄北野線を挟んだ南東の敷地で、竪穴住居跡や掘立柱建物跡、「船室」の墨書土器などが多数見つかっており¹⁾、また、すぐ東側では平安以降の基礎状遺構を立会調査で確認している²⁾。試掘調査の時点ではテニスコートおよびクラブボックスとなっていて、以後も当面使用されるとのことから、コート面を避けるなどの配慮をしつつトレンチを設定した。



図22 調査位置図 (1:5000)

2 遺構・遺物

トレンチは南北4本、東西2本の合わせて6本設定した。

層序 南北に100m以上ある調査区ではあるが、基本的な層序は大体同じ様相を呈する。地表から30～40cmまでグラウンド整備に伴う表土、バラス、整地土があり、次に近現代の盛土、整地土、地山となる(図23)。主だった遺構は整地土層上で検出しているが、2トレンチで検出

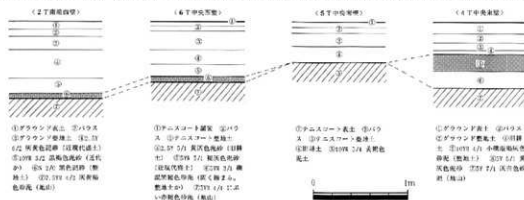


図23 土層断面図 (1:40)

した土壌3のように、その下層の地山面から切り込む遺構も存在する。遺構面である整地土層は、敷地南端の2トレンチではGL-80cmで検出されるが、3トレンチから6トレンチ南端にかけては-60cmでは安定し、4トレンチ北端では-30cmと浅くなっている。全体に遺物が僅少で整地の年代ははっきりしないが、わずかに出土する小片からは、古代末頃まで遡るのではないかと考えている。また、地山面も北と南では検出した深さに最大40cmほどの差があるが、流水や人為的な造作によって、単純に北浅南深で検出されてはいない。

〈1トレンチ〉

石列1（基壇状遺構）および溝2 1トレンチの中央付近で検出したもので、西が高い段差状を呈し、斜面部分は20cm前後の河原石で化粧（石列1）されている（図25）。壁際で断ち割りを入れたところ、化粧石の据え付け掘形も確認された。トレンチ幅が限られていたため正確には分からないが、石列の方位はほぼ正南北か、北でやや西に振るようである。検出した段の高さはおよそ30cmを測る。この基壇状遺構は黄褐色系と黒色系の砂泥を積んで築成されているが、水平層位は観察されず、石列1の西2.3m地点、⑫・⑬層を中心に東西へ積み広げているような土層が観察される。断ち割りがごく小さいものだったため、積土内の出土遺物はほとんどないが、⑭層からは布目瓦片や須恵器片が出土した。

石列1の西2.9mでは南北方向の溝2を検出した。基壇状遺構を切り込んで作られており、幅約1.0m、深さ0.2mを測る。冒頭で述べたように当該地は寺城西縁部に推定され、廃寺の中軸線も北で西へ約3度振るとされるため、調査時には、まず石列1と溝2を一連の遺構と見て、両者の間が築地のような遺構、すなわち北野廃寺の西限施設である可能性を考えた。しかし、その北延長線の確認を主眼に掘削した4トレンチでは、後述のように数条の溝が検出されただけで類似の遺構はその痕跡も認められず、溝によって壊されていることも考えられるとはいえ、西限施設として南北に長く延びる可能性は低いと判断された。これに対して、溝2を石列1より時代の下がるものと見て、先に述べたような積土の状況から「基壇」がさらに西へ広がると考えることもできるが、トレンチ調査

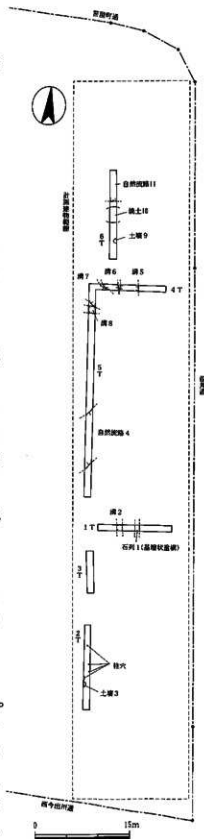


図24 トレンチ位置図 (1 : 600)

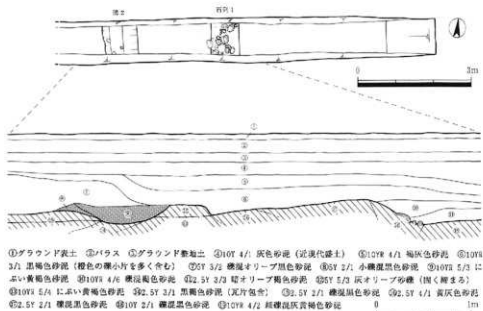


図25 1トレンチ石列1・溝2部分遺構平面図 (1:100) および土層断面図 (1:40)

では積土の西限が不明瞭で、この案も積極的には支持できない。基壇であることを示すような柱穴や礎石据え付け痕跡も見出せず、残念ながら遺構の性格について、現場では追究しきれないままとなった。

<2トレンチ>

土壌3 2トレンチの南寄りで検出した。黒褐色砂泥で埋まっており、埋土中からは1片のみだが黒色土器碗が出土した。内黒仕上げで暗文は認められず、9世紀後半ないし10世紀初頭かと思われる。2トレンチではその他に柱穴4基を検出した。

<4および5トレンチ>

4トレンチでは石列1ないし溝2の続きの検出が期待されたが、5トレンチとのコーナーにかけて溝5~8を検出したにとどまった。これらの溝の埋土はいずれも流水堆積ではなく、人為的に埋められたものと思われる。このうち溝7の埋土中には土器片が比較的多く包含されるが、年代判別に有効な個体は見出すことができなかった。ただしこれらの溝は整地土層を切って成立しており、それ以降のものであることは明らかである。これに対し5トレンチの南半で検出した溝はほとんど砂礫で埋まっており、自然流路と判断される。



図26 土壌3出土土器 (1:4)

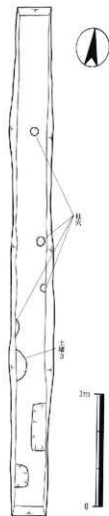


図27 2トレンチ平面図 (1:100)



写真9 石列1検出状況（東から）

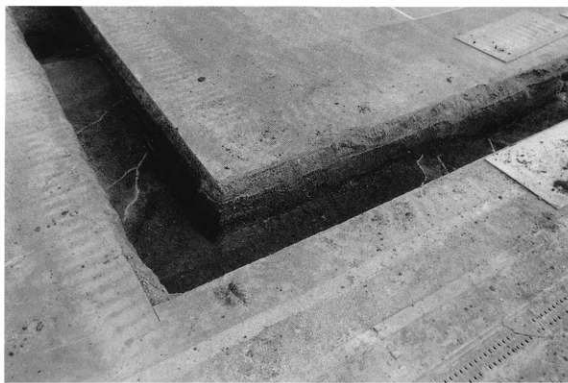


写真10 溝5～8検出状況（北西から）

〈6 トレンチ〉

今回最も北に設けたトレンチで、推定寺域の北限にも近い地点である。このトレンチでは、土壌1基と自然流路1条、および焼土の広がりを確認した。

焼土10 トレンチの中央付近でおよそ2.5mの範囲に認められる。明確な遺構や遺物は見出すことができなかったが、竈のような施設の可能性がある。

自然流路11 南屑だけを検出した東西方向の流路である。幅4m以上と大型で、砂礫とシルトで埋没している。整地土はこれを覆う形で認められる。

3 まとめ

今回の調査では、大きく見て対象地の南半に基壇状遺構や柱穴など建物関係の遺構が、北半では整地土の下で自然流路、上で人為的に埋められた不定形の溝（流路）など流水関係の遺構が検出された。寺域の縁辺部であるためか遺物の出土は僅少であったが、基壇状遺構などは直接北野廃寺にかかわる可能性もあることから保存措置の必要を認め、事業主側との協議を行った結果、設計変更によって地下に残されることとなった。

（堀 大輔）

註

- 1) 梅川光隆『北野廃寺跡 シャルマンハイム白梅町新築に伴う発掘調査の概要』（(財)京都市埋蔵文化財研究所 1982年）
- 2) 竜子正彦『北野遺跡・北野廃寺1(97RH23)』『京都市内遺跡立会調査概報 平成9年度』（京都市文化市民局・(財)京都市埋蔵文化財研究所 1998年）

1 調査経過

この試掘調査は、一階建築面積約400㎡の3階建て賃貸マンション建設に伴って平成12年5月29日に実施した。調査の場所は南区久世殿城町167番地、国道171号線久世殿城交差点から一筋南を西に入った国道と新幹線高架とのちょうど中間に位置する。この付近は殿城町の集落内に位置しているため、一軒の区画が広い旧家の多い所である。当該地もこのような旧家を取り壊した場所であり、近隣での調査事例はあまり無い。

調査は計画のマンションが東西に細長いため、その計画に合わせ東西方向のトレンチを設定して開始した。トレンチの西端部分では近世から近代にかけての南北方向の水路跡を検出した。水路の深さは1.7m、幅は5m以上あり、戦前の地図を見ると検出地点に水路は描かれていないが、この水路跡を南に延長したところには、南北の水路が描かれていることから一連の水路と考えられ、集落の拡大に伴って埋め立てられ道に変わったようである。この水路跡の東側では、弥生時代と考えられる南北の溝状遺構を2本と柱穴、さらにトレンチの東半部では中世の柱穴群を検出した。これらの遺構群については近世の水路以外は、ほとんど掘り下げを行っていないので詳細は分からないが、以下にその概要を記す。

2 遺構

調査地内の層序は、単純で現地表面から浅いところで30cm、深いところで60cmまでが褐色の砂泥層の堆積であり、その下は直ぐに地山の黄褐色砂泥となる。近世の水路以外の遺構は全てこの地山面で検出した。

溝1 トレンチの西寄りで検出した南北溝であるが、南に向かって次第に東へ曲がるようである。幅は約2.5mあり、深さは部分的な掘り下げによって0.6m以上あることを確認、その断面形はV字形と考えられる。埋土は黒褐色泥土で小片の土器（弥生時代頃か）を少し採集した。

溝2 溝1から東へ4m離れて検出した南北溝である。幅は溝1と同様に2.5mあるが、深さについては掘り上げていないため不明である。埋土は溝1とよく似た極暗褐色砂泥である。また溝1と2の間で柱穴を2個検出したが、これらの柱穴も溝と埋土がよく似ていることから同じ頃の遺構として捉えておく。

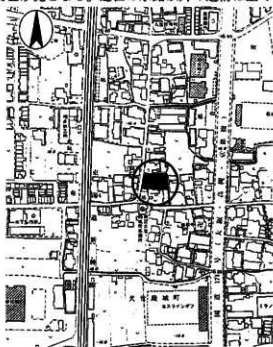


図28 調査位置図 (1:5,000)

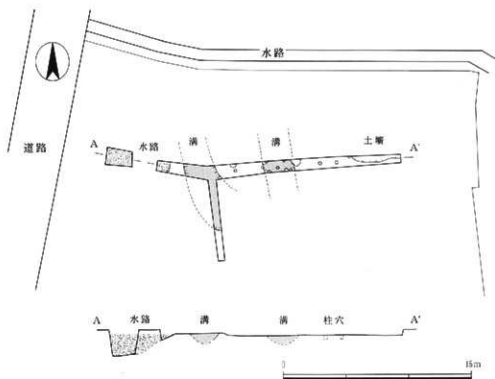


図29 遺構平面・断面図 (1:300)

柱穴群 トレンチの中央から東半部で検出した直径30cm前後の円形柱穴群で、10個ほどを確認した。これらの柱穴の埋土は、どれもよく似た褐色砂泥であることや瓦器片等が混ざっていることから、中世の集落に関連した遺構と考えられる。またトレンチの東端では東西長が4m以上の土壌も検出しているがこれも同時期の遺構と考えられる。

3 まとめ

今のところ弥生時代頃を想定している2本の南北溝は、環濠や周溝墓の溝などの可能性を持つものである。また、同時に多数の中世の柱穴を発見したことは、中世集落の中心地に近い所であることを想像させる。なお、発見した遺構の取扱いについては、工務店との協議によって計画建物の基礎形状を変更することで遺構保存の措置が図られた。

(長谷川行孝)



写真11 トレンチ全景 (西から)

IX 長岡京跡 No. 84

1 調査経過

調査地は伏見区羽東師菱川663-1地で、近年周辺では宅地造成が活発に行われている。今回の試掘調査も7,500㎡を越える宅地造成の計画に作ったもので、平成12年9月6日・7日の2日間にわたって実施した。その結果、敷地の大半を占める北半部は湿地状の堆積を示していたが、取り付け道路となる南半部では弥生時代から古墳時代前期と考えられる竪穴住居跡3棟と土塙7基を検出した。

しかし、遺構の検出高が現地表面から1.3mと深く、当該土木工事では下水管布設に伴う掘削を除き遺構が破壊される可能性が低いため、施工主と協議を行った結果、下水工事中に立会調査を実施することにした。

この報告では、立会調査の結果と、平成10年に西側隣接地で行った試掘調査²⁾の結果も併せて報告する。



図30 調査位置図 (1:5,000)

2 遺構

基礎掘削深度の浅い木造2階建て建売住宅を想定した造成工事のため、調査区は計画道路部分に設定することにした。しかし実際には、西羽東師川に近い敷地の東半部で大量の建築廃材が置かれていたため、北半部東側の計画道路部分は設定不可能であった。また、南半の取付道路部分も工事車両の進入路として使用されていることから、調査区を道路外に設定した。1トレンチは幅1.4m・長さ26.6m、2トレンチは幅1.6・長さ13m、3トレンチは幅1.3m・長さ7.2m、そして4トレンチは幅1m・長さ38mであった(図31)。

1～3トレンチでは、幅約1.3mの時期不明の東西溝1本が1トレンチで検出された以外は、非常に希薄で、全体に湿地状堆積であった。ここでは、4トレンチで検出した遺構を中心に説明する。

竪穴住居1 4トレンチ北端部分の現地表面下約1.35mの黄褐色シルト層上で検出した(図32)。検出部分は竪穴住居の南北両端で、その両端部の長さは3.4mある。トレンチ東壁の断面観察から、竪穴住居2を切って成立しており、竪穴住居2よりは新しい。幅約30cmの壁溝をもち、埋土は上下2層にわかる。上層は焼土を多く含む堅く締まった赤橙色の砂泥であり、下層は軟

質の褐色泥砂であった。上層と下層の境界部分には炭が集中して堆積していた。

竪穴住居 2 竪穴住居 1 に切られた一辺3.9mの住居跡（図32・33）で、現地表面から約1.3m下の黄褐色シルト層上で検出した。直径33cm、深さ64cmの支柱穴2個を検出した。支柱穴内には木炭片が多く含まれており、埋土は灰色泥土である。周囲に25～55cmの壁溝をもっており、北側壁溝の埋土は明黄褐色粘質土に黒褐色泥土が混ざっていた。南壁溝には褐色泥土が認められた。竪穴内部の埋土は支柱穴と同じく木炭片を多く含んでおり、暗褐色泥土に明褐色粘質土が混在している。

竪穴住居 3 トレンチ南端から9.2m、現地表下1.1mで検出された。一辺約3.9mの方形で、完全に掘削していないため、その詳細は不明だが、竪穴内部で柱穴2個、小土壇1個を認めた（図32・写真12）。小土壇は竪穴の推定南西角にあり、貯蔵穴の可能性をもつ。壁溝は確認していないが、深さは20～30cmあり、埋土には他の竪穴と異なり炭等があまり含まれていなかった。

竪穴住居 4 西側に隣接する敷地の試掘調査で検出した南北3m以上の焼土面をもつ方形の竪穴（図32）で、遺構検出レベルは地表面から2.14m下層であるが、かなりの盛土がなされており、今回の調査レベルとはほぼ同一と考えられる。

その他の土壇・柱穴 4 トレンチ内では竪穴住居跡以外に直径約0.2～1.4mの複数の柱穴や土壇を検出した。検出レベルは竪穴住居跡と同一で、遺構埋土は褐灰色砂泥であった。西側隣接地でも0.7～1.2mの土壇を検出しており、埋土は同じ褐灰色砂泥であった。遺物はいずれも小片で時期を確定するには至らなかった。

3 まとめ

試掘調査後実施した下水管敷設に伴う立会調査で、計画道路南端から北へ約44.5m、深さ1.35mのところから、3m以上の幅で炭混じりの灰色粘土層が検出された。同層中から弥生時代の壺片が出土しており、調査者は竪穴住居跡の可能性を考えている⁷⁾。今回の試掘及び立会調査と西側隣接地の調査、及び既往の周辺調査から判断すると、敷地中央部を流れる農業用水路（羽東師号2号線）を挟んで北側は西羽東師川の本型となる旧河川の後背湿地であったと考えられる。そし

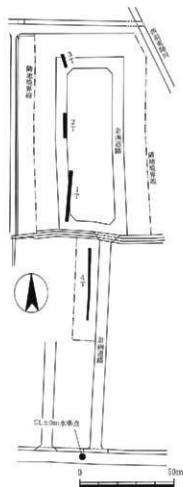


図31 トレンチ位置図 (1:2000)



写真12 竪穴住居3 検出状況 (南から)

て、弥生時代から古墳時代前半までの人々は、当該敷地南半のわずかな微高地に竪穴住居を築いて生活を営んだのではないだろうか。

(馬瀬智光)

註

- 1) 当センターが試掘調査を実施するようになった平成3年度以降、今年度まで、羽東師妻川町内で合計12件の試掘調査が実施されているが、その大半が宅地造成に関するものである。
- 2) 京都市埋蔵文化財調査センター「試掘調査一覽表」「京都市内遺跡試掘調査概報 平成10年度」(京都市文化市民局 1999年 31~34頁) 34頁の83地点の調査。
- 3) 立会調査を実施した(財)京都市埋蔵文化財研究所の吉本健吾氏から、ご教示を得た。
- 4) 今回の調査のすぐ南側の羽東師小学校内の調査では、古墳時代前半以前に遡る住居跡は検出されておらず、集落の範囲は非常に限定されると考えられる。『長岡京跡発掘調査報告(京都市埋蔵文化財研究所調査報告第2冊)』((財)京都市埋蔵文化財研究所 1978年) 参照。

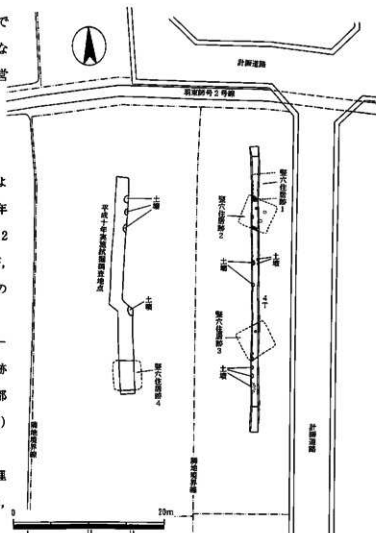
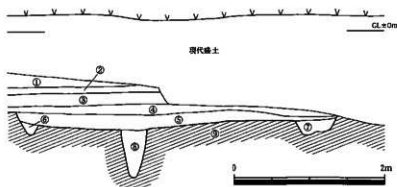


図32 遺構分布図 (1:500)

前に遡る住居跡は検出されておらず、集落の範囲は非常に限定されると考えられる。『長岡京跡発掘調査報告(京都市埋蔵文化財研究所調査報告第2冊)』((財)京都市埋蔵文化財研究所 1978年) 参照。



- ①旧耕作土
- ②床土
- ③SDG5/1青灰色泥土
- ④7.5YR5/6明褐色粘質土
- ⑤7.5YR3/3暗褐色泥土・7.5YR5/8明褐色粘質土(木炭多く含む)
- ⑥7.5YR5/1褐色泥土(竪穴住居跡2壁溝埋土)
- ⑦7.5YR5/6明黄褐色粘質土・7.5YR3/1黒褐色泥土(竪穴住居跡2壁溝埋土)
- ⑧N40灰色泥土(木炭多く含む、竪穴住居跡2内柱穴埋土)
- ⑨10YR5/6黄褐色シルト(地山)

図33 竪穴住居跡2部分西壁土層図 (1:50)

X 岩倉幡枝町内範囲確認調査 No.13

1 調査経過

洛北第三土地区画整理事業は、岩倉自動車教習所のあるケシ山の裾を南限とし、西は本山、北は木野の集落、東は一条山や八幡神社の所在する丘陵地に囲まれた田畑を対称として実施される。この区画整理事業のエリア内には、埋蔵文化財包蔵地として八幡古墳群と栗栖野瓦窯の一部が含まれているため、平成8年1月16日付で土木工事の通知書が提出された。ただし今回の工事では、古墳や窯跡を直接掘削するような所まで対象にはなっていない。

事業計画地内で遺跡の網のかかる範囲は僅かであり、施工区の大半は遺跡の有無が不明の空白地であった。このため平成10年6月に2回にわたって（財）京都市埋蔵文化財研究所と当センターで分布調査を実施した。この調査では、栗栖野瓦窯跡の遺跡外の畑で須恵器などの土器類を少量採取した。また、事業地の北端、京都市立北陵高校の西側の農地で平安時代の前中期頃を中心とする須恵器、陶器などが一定量散布しているのを確認した。この時点ではこれらの土器が散布する農地が長代川によって形成された扇状地であり、上流から上砂と一緒に押し流されてきた遺物の可能性もあるため、散布地の性格については不明のままに終わった。

平成11年度になってこの地区での工事が行われることになり、（財）京都市土地区画整理協会との協議の後、当センターにおいて試掘調査を平成12年1月19・20日に実施した。調査は平成11年度道路施工区の内、幅6mの東西道路である区画9号線街路（長さ92m）を対象として、東から西に向かって4箇所トレンチを設定して実施した。

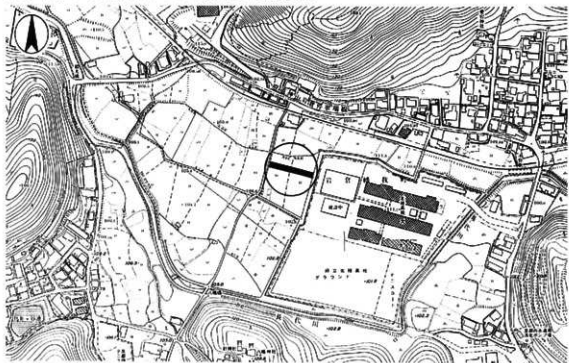


図34 調査位置図 (1:5,000)

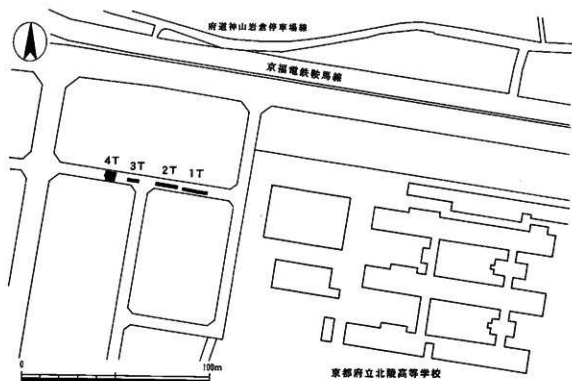


図35 トレンチ位置図 (1:2,000)

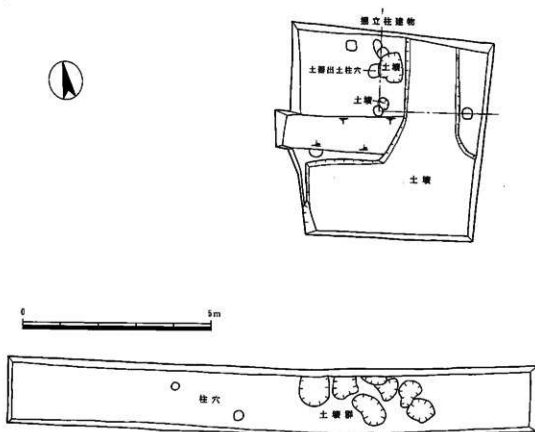


図36 1トレンチ(下)4トレンチ(上)平面図 (1:100)

2 遺構・遺物

各トレンチとも基本的な層序は同じで、かつ単純であった。耕作土直下が地山の粘質土であり場所によってその土質が砂泥になったり色が灰白色や黄褐色に変わっていたりする。以下に各トレンチの概要を記す。

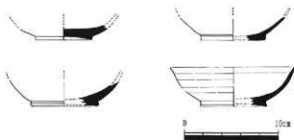


図37 出土土器実測図 (1:4)

1 トレンチ (幅1.5m・東西13.7m) 東端に設定したトレンチである。耕作土直下の地山である灰白色粘質土の上面で、直径20~25cmの柱穴と長径が0.5~1mほどの土窟を数基検出した。柱穴は小さく、建物としてはまとまらない。また土窟群は1箇所に集中して見つかったが、その平面形はどれも不定形で掘形も一定でないことから、耕作に伴う攪乱のようなものではないかと考えられる。

2 トレンチ (幅1.5m・東西12m) ・ 3 トレンチ (幅1.5m・東西6m) 耕作土直下は灰白色の粘質土であり、共に遺構・遺物は発見できなかった。

4 トレンチ (南北5.5m・東西5m) 道路予定地の西端に設定したトレンチである。耕作土直下の黄褐色砂泥層で柱穴や土窟などを発見したことにより、調査区を道路予定幅まで拡張して調査を続行した結果、柱穴6基、土窟3基などを検出した。

柱穴は直径が20~30cmほどの小ぶりのもので、内3基は建物として捉えることも可能であるが、全体像は不明である。検出した柱穴の1つからは図37の右下に掲載した須恵器の碗が出土した。

3基検出した土窟の内1基は、その平面形が逆T字形を呈し、南北5m以上、東西4.4m以上、



写真13 1トレンチ全景 (西から)



写真14 2トレンチ全景 (東から)

深さが0.6mほどある大きな土壇であった。この土壇内からは平安時代の須恵器、瓦などが遺物袋に1袋分ほど出土した。図37に掲載した右下の須恵器碗を除く3個の須恵器碗がこの土壇から出土したものである。この土壇の掘形はほとんど垂直に近く、出土品の中には江戸時代の土師器片なども混入していることから、遺構自体は近世以降の粘土採掘穴のようなものが考えられる。他の土壇については1トレンチと同様に不定形であったり、小さなものであったりして性格は不明である。

3 まとめ

調査地を含む周辺の農地を地元では、御反田（ごたんだ）と呼び、長代川によって形成された北西から南東に向かって緩やかに傾斜している扇状地の上に営まれている。農地の北側は東西に横切る叡山電鉄鞍馬線を挟んで木野集落が所在し、集落の背後の山間には奈良時代から平安時代にかけて土器を焼成した窯跡が点在していることが分布調査や発掘調査で判明している。また木野の集落では近代まで素焼きの土器造りが行われていた所でもある。

今回の調査では平安時代の土器や瓦が出土し、小さくはあるが柱穴なども検出した。遺物の出土した土壇自体は近世の粘土採掘穴ではないかと考えられ、その埋め土に土器や瓦が混じったと考えられるが、柱穴も発見したことから周辺に何らかの遺跡の存在が予想される。

（長谷川行孝）

注 出土品については、(財)京都市埋蔵文化財研究所の小森俊寛氏からご教示を受けた。



写真15 4トレンチ全景（北から）

表3 試掘調査一覧表

平成11年度 1～3月期

平安宮

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	番号
大宿直・聚楽第跡	上・真門通中立売下の高台院整町207	3/29	GL-2.0mまで掘削するが地山確認できず。粘土探掘機もしくは聚楽第の礎石か。	20㎡	1
大 蔵	上・上長者町通千本東入宿直町473	2/28	GL-0.8m以下で時期不明の整地層2面を確認。GL-1.05mで砂礫の地山。	12㎡	2
栄女町	上・千本通出水東入尾ヶ崎横町350	3/13	GL-0.8mで地山の聚楽土。柱穴5個を検出。	23㎡	3
朝堂院	中・聚楽遷東町22-3,22-5	1/17	GL-0.66～-1.25mで地山。粘土探掘による攪乱。	11㎡	4

平安京左京

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	番号
三桑一切十一町	中・西ノ京池ノ内町19	1/27	GL-1.1mで地山の砂礫層。遺構・遺物なし	29㎡	5
五桑三坊十三町	下・高辻通鳥丸東入因幡堂町661	2/2	GL-1.5～-1.7mで地山の砂礫層。平安、室町、江戸時代の土壌各1基、室町時代の溝1条を検出。	44㎡	6
八桑四坊二町	下・東洞院通七条下る東塩小路町555	2/7	GL-0.96m以下で平安から室町時代にかけての遺構・遺物を多数検出。発掘調査を指導する。	93㎡	7

平安京右京

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	番号
二条二坊十五町	中・西ノ京中御門東町49	3/27	GL-0.7mで平安時代前中期の柱穴・土壁などを検出。発掘調査を指導する。	47㎡	8
六条三坊一町	右・西院寿町16-1	1/6	GL-0.8mの地山上で平安時代の東西溝4条検出。	35㎡	9
七条三坊十三町	右・西京極大門町26,26-2の一部	1/31	GL-3.0mで地山の砂礫層。旧天祥川の氾濫層。	36㎡	10
七条三坊十三町	右・西京極大門町26の一部	1/31	GL-2.4m以下、湿地状堆積。	25㎡	11
八条二坊九町	下・西七条南衣田町32,33,37	1/13	GL-0.6～-0.8mで地山の砂礫層。幅約4mの平安時代の南北溝1条を検出。	42㎡	12

洛北地区

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	番号
岩倉榎枝町内範圍 確認調査	左・岩倉榎枝町池1ヶ町	1/19-1/20	耕作土直下で地山。雑物跡1種の他、溝、柱穴、土壁等を検出。現在の木野の西方に集落ないし工房があった可能性あり。本文30頁	77㎡	13
史跡 御土居	北・紫竹上堀川町1,1-15	2/14	御土居の北限境界を確認する。	54㎡	14
史跡 御土居	北・平野角屋前町24-13	3/6	産土直下、現西側道路と同一レベルで地山。	27㎡	15
北野廣寺跡	北・小松原南町43	3/6-3/9	GL-0.3～-0.8mで遺構面。乱石積み基礎(築地?)、溝・柱穴等を検出。設計変更を指導する。本文20頁	81㎡	16

北白川地区

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	番号
六磨寺跡	左・阿闍南面所町35-15	1/11	GL-0.3mで地山。瓦の廃棄土壌を2基検出。	51㎡	17

洛東地区

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	番号
法性寺跡	東・榴橋上高松町11	3/1	GL-1.1mで黄褐色砂泥の遺構面。時期不明の溝2条、ピット2基、土壁1基を検出。	41㎡	18
中臣遺跡	山・勸修寺西金ヶ崎211	2/25	耕作土直下で南北溝3条を検出。	69㎡	19

鳥羽地区

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	番号
鳥羽羅宮跡	伏・竹田真幡木町159-1棟	1/24	GL-1.2mで中世の柱穴2個を検出。	28㎡	20

平成12年度 4～12月期

平安宮

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	番号
大蔵・聚楽第跡	上・中立売通淨福寺東入新科屋町420	7/26	GL-0.7mで地山の黄褐色シルトや粘質土を検出。	13㎡	21
大蔵・聚楽第跡	上・中立売通淨福寺西入加賀屋町387他3棟	9/12	敷地北側で大規模な東西方向の落ち込み、聚楽第の履跡か。GL-0.7mで地山を確認。	26㎡	22
左近衛府 ・聚楽第跡	上・下長者町通智恵光院東入西辰巳町113、114	5/17	GL-2.0mまで地山確認できず。聚楽第の履跡か。	13㎡	23
梨木・巖御曹司 ・聚楽第跡	上・下長者町通智恵光院西入本町94,96	8/7	安土桃山時代の東西溝1条検出。敷地北端で平安前期の包含層。	26㎡	24
西院	上・日暮通丸太町上る西入西院町746-2	11/8	地山直上まで現代盛土。明確な遺構なし。	40㎡	25
中番省	上・下立売通千本東入下る中番町490-15	9/5	GL-1.1mで地山。中番省北側の掘溝なし。	5㎡	26
中番省	上・淨福寺通丸太町下る主税町1053	7/19	GL-0.36mで地山の褐色泥砂、平安時代の南北溝1条、土壌1基を検出。本文5頁	15㎡	27
朝堂院	上・丸太町通土屋町西入中番町491-23	4/24	GL-0.3m以下、黄褐色砂泥の聚楽土。	22㎡	28
妻松原	上・七本松通仁和寺街道下る二番町211	11/29	GL-2.2mまで粘土探測による境見。	17㎡	29
右馬寮	中・西ノ京右馬寮町3	4/17	GL-1.3mでふい黄色砂礫の地山。	14㎡	30

平安京左京

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	番号
北辺三坊五町	上・鳥丸通一条下る龍留町594,中立売通鳥丸西入東町480,480-1,480-2	11/22	中世の土壌、平安時代の東西溝(推定正観町北側溝)を検出。また、桃山時代の整地層から金箔瓦が出土。発掘調査を指導する。巻頭図版	43㎡	31
一条三坊十一町	上・堂町通下立売上る勘解由小路159他	6/19	旧二条城の時期に前後する遺構・遺物を多数検出。発掘調査を指導する。巻頭図版	100㎡	2
旧二条城跡	中・堺町三条上る大坂材木町692,696-2,堺馬場通三条上る油屋町99-1,89-2,91	7/3	平安時代から鎌倉時代の井戸・土壌・柱穴など多数検出。発掘調査を指導する。	19㎡	33
三条四坊五町	中・堺町三条上る大坂材木町692,696-2,堺馬場通三条上る油屋町99-1,89-2,91	7/3	平安時代から鎌倉時代の井戸・土壌・柱穴など多数検出。発掘調査を指導する。	19㎡	33
四条二坊一町	中・大宮三条下る三条大宮町253	5/26	GL-1.6mで南北溝(大宮大路東側溝か?)や、中世の南北道路などを検出。	29㎡	34
四条三坊西町	中・西洞院通橋小路下る織師山町479他111等	12/20-12/21	視察難しいが、GL-1.53m以下で中世の溝1条、土壌1基、平安の土壌等を検出。	96㎡	35
四条四坊十二町	下・四条通地蔵町西入立売東町1	7/24	GL-2.0mで平安時代の整地層及びその上面で柱穴や土壌を検出。発掘調査を指導する。	36㎡	36
五条二坊一町	下・黒門通四条下る下り松町152他,藤原通四条下る松本町262他	8/2	中世後半～近世の土壌・柱穴・溝・自然流路を検出。妙蓮寺の構えに関連する遺構か。	68㎡	37
五条二坊十一町	下・藤ヶ井通仏光寺下る兜神町467他	4/27	GL-1.0mで平安～近世の土壌・溝・柱穴などを検出する。	31㎡	38
六条二坊三町	下・大宮通五条下る東洞院南門町480	5/8	近世以後の土壌7基以上を検出。	24㎡	39
六条三坊十六町	下・鳥丸通松原下る五条鳥丸町404他	4/12	地下室と近世の視察により破壊著しい。土壌1から大量の土師器瓦出土。本文8頁	24㎡	40
七条一坊二町	下・西新屋敷上之町128	6/21	GL-1.0mで平安時代の南北溝(推定坊城小路東西側溝)を検出。立会調査指導。本文10頁	47㎡	41
八条二坊六町	下・梅小路通御所南奥町180番地	8/21	GL-1.3mで中世の土壌、井戸、池等を検出。	95㎡	42
九条一坊十町	南・大宮通八条下る東中町592	12/4-12/5	GL-0.49～0.86mで近世東寺の塔頭開運の板石列、敷地区画石列、柱穴、土壌などが良好に遺存する。発掘調査を指導する。	224㎡	43
九条三坊一町	南・西九条院町21	8/10	平安末～鎌倉頃の建物地蔵の他、土壌、井戸、溝等を検出。発掘調査を指導する。	47㎡	44
九条三坊九町	南・東九条上殿田町44他	4/3	GL-0.65mで遺物を多く含む整地土層が良好に残る。敷地東側は記憶地蔵。設計変更を指導する。	46㎡	45

平安京右京

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	番号
五条三坊四町	右・西院寿町20	5/24	GL-1.3m以下で溝状遺構を検出。	14㎡	46
五条三坊十町	右・西院久田町83,84	10/16	大半は湿地帯。五条坊門小路北側溝を検出。	60㎡	47
六条二坊四町	下・西七条赤土町10	4/20	GL-0.95mで地山の明黄褐色砂礫層。	38㎡	48
六条三坊四町 ・七条三坊一町	右・西院西中水町2-1他	11/15	GL-0.75cm~1.05mで地山。六条大路部分は河川の氾濫や湿地状堆積であった。	18㎡	49
六条三坊四町 ・六条大路	右・西院清堀町21	10/30	耕作土以下は湿地状堆積。	41㎡	50
六条三坊九町	右・西院道分町4-1,5-6	12/22	GL-2.0mで時期不明の南北の溝6本を検出。	37㎡	51
六条三坊十四町 ・十五町	右・西院久保田町6-7他	12/18	GL-1.4mで古墳時代後期の南北溝1条(幅約4m)を検出。平安時代以降は柱穴1個のみ。	55㎡	52
六条四坊十五町	右・西京極野田町39	7/51	GL-1.15mで土器破片などを含む砂礫堆積。	46㎡	53
七条一坊十三町	下・西七条北東野町18-1,18-2	10/4	敷地北側はGL-0.5~0.6mで中世の土壌層群。七条大路側では横立柱遺物を検出。設計変更を指導する。本文13頁	42㎡	54
七条三坊八町	右・西京極北庄堤町75	11/20	GL-2.0で灰色泥土の湿地状堆積。	44㎡	55
七条三坊十三町 ・木辻大路	右・西京極東町46の一部,47-1の一部,47-3	4/19	GL-2.1m以下,旧天神川の流路堆積。	16㎡	56
七条四坊十町	右・西京極東池田町8	6/5	GL-0.9mで湿地状堆積。	13㎡	57
八条二坊十町	下・七条御所ノ内北町91	4/10	GL-0.3mで砂礫層の地山。	38㎡	58
八条三坊十六町	右・西京極加田町11-1他5筆	11/27	GL-4.0m前後で湿地状堆積。	14㎡	59
九条西坊八町	南・吉祥院宮ノ西町11他	6/14	GL-1.4mで,桂川の氾濫堆積。	26㎡	60

太秦地区

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	番号
花園宮ノ上町遺跡	右・花園土堂町10他	10/25-10/26	敷地の南端部を除き, GL-0.3m以下で平安時代の雨落溝や平安時代以降と推定される30cm前後の柱穴を多数検出。発掘調査を指導する。	211㎡	61
門田町遺跡	右・太秦藤ヶ森町1他	12/25	GL-0.5mで小柱穴,不定形土塊等を検出。	208㎡	62
史跡名勝風山	右・嵯峨天龍寺芒ノ馬場町3-39	5/10	南側道路+15cmで室町時代の土壌1基,柱穴4個を検出。火災痕跡あり。本文17頁	25㎡	63

北白川地区

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	番号
北白川廣寺跡	左・北白川山田町1-1	12/12	北白川扇状地の谷部で,寺院遺構なし。	33㎡	64
北白川廣寺跡	左・北白川大堂町54	5/17	GL-0.7~1.48mまでは整地層,以下は黒褐色泥砂及び明黄褐色砂の地山で顕著な遺構なし。	29㎡	65
法興院跡	中・河原町通二条上の清水町341-11,指物町338-5	6/12	GL-0.35m以下で江戸後期以後の黄土層2面を確認。その下層は鴨川の氾濫堆積。	30㎡	66

洛東地区

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	番号
中 臣 遺 跡	山・西野山中臣町15-1	7/5	GL-0.46mで地山の砂礫層。遺構・遺物なし。	15㎡	67
中 臣 遺 跡	山・西野山中臣町15-1	7/5	敷地西端で田安祥寺川の段丘端部を検出。	77㎡	68
中 臣 遺 跡	山・西野山中臣町75,75-24,74-9	10/11	GL-0.55mで地山の浅黄褐色砂泥。古墳等なし。	44㎡	69
中 臣 遺 跡	山・薬師野打越町35-3,36-9,39-5	7/17	GL-0.24~0.52mで黄褐色砂泥の地山。時期不明の土壌3基,柱穴1基を検出。	47㎡	70
中 臣 遺 跡	山・勧修寺京薬師町10-1	10/24	GL-0.2mで直径30cm前後の柱穴3個を検出。	34㎡	71
中 臣 遺 跡	山・勧修寺西薬師町203	5/19	GL-0.25~0.60m以下で地山。直径20~45cmの柱穴を複数検出。	28㎡	72
中 臣 遺 跡	山・勧修寺西薬師町248-1	8/28	GL-0.8mで黄褐色砂泥の地山。遺構,遺物なし。	19㎡	73

伏見・醍醐地区

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	番号
伏見城跡	伏・桃山簡井伊賀町46 京都教育大学附属 桃山小学校地内	4/6	瓦溜1・土壇3・柱穴1を地山面上で検出。	32㎡	74

鳥羽地区

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	番号
鳥羽離宮跡	伏・竹田真幡木町88, 87	6/7	GL-1.3~1.4mで流水堆積。	29㎡	75
鳥羽離宮跡	伏・竹田神菩提院町308	10/2	GL-1.94mで湿地状堆積。遺構なし。	12㎡	76

南・桂地区

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	番号
福西古墳群	西・大枝東長町1-464	8/8	盛土直下で旧表土を確認したのみ。工事中の立会 調査を指導する。	19㎡	77
中久世遺跡	南・久世中久世町3丁目82他	5/2	南下がりの弥生時代の湿地状堆積を確認。	48㎡	78
中久世遺跡	南・久世中久世町5丁目54.55	5/22	GL-0.43mで黄褐色粘質土の地山。遺構なし。	40㎡	79
中久世遺跡	南・久世殿城町167	5/29	表土直下で積濼の可能性ある南北溝2本を検 出。設計変更を指導する。本文25頁	26㎡	80

長岡地区

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	番号
長岡京跡	南・久世東土川町194-1	11/13	設計GL-1.56mで地山の黄褐色砂泥。将来、掘削 深度が地山に達する場合、再試験が必要。	17㎡	81
長岡京跡	伏・羽東師斐川町591-1他	9/27-9/28 12/11	調査可能範囲狭小。現代の盛土が厚く、遺構・遺 物検出せず。	32㎡	82
長岡京跡	伏・羽東師斐川町663-1他	9/6-9/7	敷地北半は湿地状堆積。南半ではGL-1.3mで、整 穴住居跡3棟、土壇等を検出した。工事中の立会 調査を指導する。本文27頁	104㎡	83
長岡京跡	西・大原野上原南ノ町923-2他3筆	5/15	小畑川の河岸段丘で、遺構・遺物は検出できず。	6㎡	84

報告書抄録

ふりがな	きょうとしなにいせきしくつちようさがいほう							
書名	京都市内遺跡試掘調査概報 平成12年度							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	梶川敏夫・長谷川行孝・馬淵智光・堀 大輔							
編集機関	京都市遺蔵文化財調査センター							
所在地	〒602-8435 京都市上京区今出川通大宮東元伊佐町265-1							
発行機関	京都市文化市民局							
所在地	〒604-8571 京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488							
発行年月日	西暦2001年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	道路番号					
へいあんきょう 平安宮 なかつかきしょうめ 中務省跡	京都府京都市上京区 浄福寺通丸太町下る主税町1053	26100		35度 0分 52秒	135度 44分 51秒	2000/7/19	15	個人住宅
へいあんきょうさきょう 平安京左京 六条三坊十六町跡	京都府京都市下京区 鳥丸通松原下る五条鳥丸町404、 405、407地	26100		34度 59分 42秒	135度 45分 47秒	2000/4/12	24	共同住宅
へいあんきょうさきょう 平安京左京 七条一坊二町跡	京都府京都市下京区 西新屋敷上之町128	26100		34度 59分 21秒	135度 44分 50秒	2000/6/21	47	旅館
へいあんきょうさきょう 平安京右京 七条一坊十三町跡	京都府京都市下京区 西七条北東野町18-1,18-2	26100		34度 59分 10秒	135度 44分 23秒	2000/10/4	42	店舗
しせきのみしょう 史跡名勝嵐山	京都府京都市石京区 嵯峨天竜寺芒ノ馬場町3-39	26100		35度 0分 40秒	135度 40分 44秒	2000/5/10	25	個人住宅
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
平安宮 中務省跡	宮殿跡	平安時代		南北方向の溝1条・ 土塀		軒先瓦・瓦		
平安京左京 六条三坊十六町跡	都城跡	平安時代		室町時代の土塀5基		土師器皿		
平安京左京 七条一坊二町跡	都城跡	平安時代		坊城小路側溝		土師器・瓦器・木器		工事中の立会調査を指導する。
平安京右京 七条一坊十三町跡	都城跡	平安時代		土塀基群・池立柱建 物跡・柱列		土師器・瓦器・須恵器 緑釉陶器・灰釉陶器		設計変更により保存措置を 図る。
史跡名勝嵐山	史跡名勝			土塀・柱列		土師器皿・軒瓦		

報告書抄録

ふりがな	きょうとしなにいせきしくつちようさがいほう
書名	京都市内遺跡試掘調査概報 平成12年度
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	梶川敏夫・長谷川行孝・高瀬智光・堀 大輔
編集機関	京都市埋蔵文化財調査センター
所在地	〒602-8435 京都市上京区今出川通大宮東元伊佐町265-1
発行機関	京都市文化市民局
所在地	〒604-8571 京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488
発行年月日	西暦2001年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
きたのほいじあと 北野瀬寺跡	きょうとみぎやうとしきたく 京都府京都市北区 こまつばらまち 小松原南町43	26100		35度 1分 30秒	135度 43分 57秒	2000/3/8- 3/9	81	学収建設
なかくぜいせき 中久世遺跡	きょうとみぎやうとしなみなく 京都府京都市南区 くぜいのしちやう 久世殿城町167	26100		34度 57分 9秒	135度 43分 7秒	2000/5/29	26	共同住宅
ながおかきやうあと 長岡京跡	きょうとみぎやうとしなみなく 京都府京都市伏見区 はつかしひしあひやう 羽束師妻川町663-1他	26100		34度 55分 54秒	135度 43分 30秒	2000/9/6- 9/7	104	宅地造成
いわくちほいたぢらうかい 岩倉榎枝町内範囲 確認調査	きょうとみぎやうとしなみなく 京都府京都市左京区 いわくちほいたぢらう 岩倉榎枝町他1ヶ町	26100		35度 45分 3秒	135度 46分 28秒	2000/1/19- 1/20	77	区画整理
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
北野瀬寺跡	寺院跡	飛鳥時代～平安時代	基壇状遺構・溝	瓦・土師器・須恵器	設計変更により保存措置を図る。			
中久世遺跡	集落跡	弥生時代	二重の環濠・柱穴	弥生土器	設計変更により保存措置を図る。			
長岡京跡	都城跡	弥生時代・長岡京期	塹穴住居跡・土壌	弥生土器	工事中の立会調査を指導する。			
岩倉榎枝町内範囲 確認調査	散布地	平安時代	掘立柱建物跡・土壌	瀬織陶器茶地・土師器				

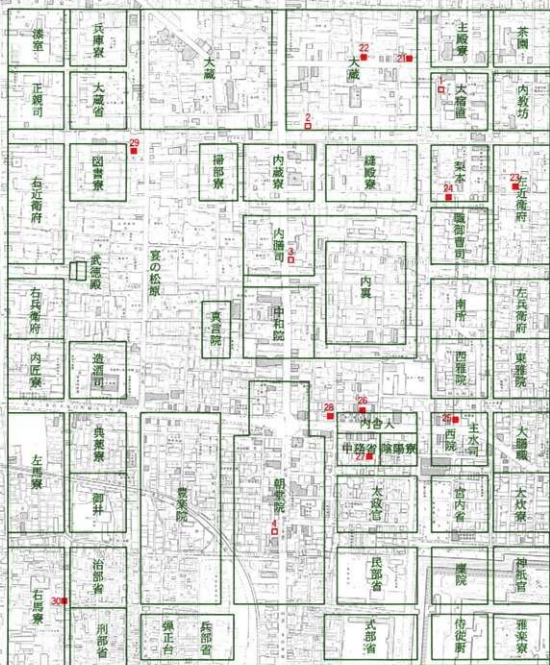
凡 例

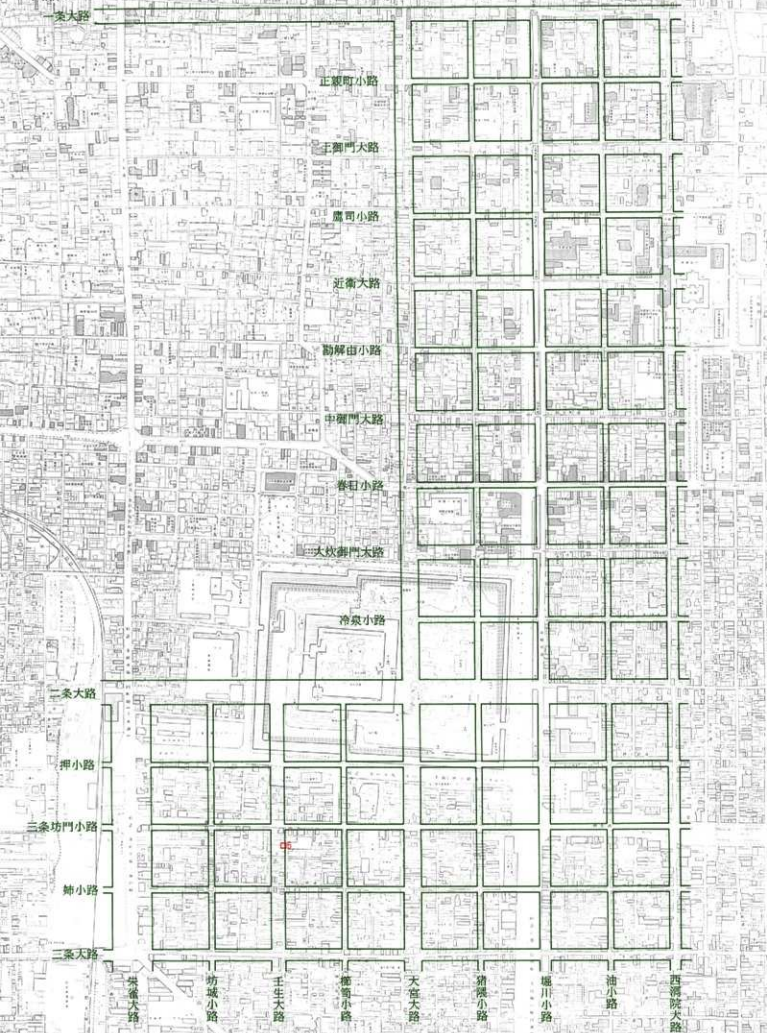
平成12年試掘調査地点

□ 1月～3月

■ 4月～12月

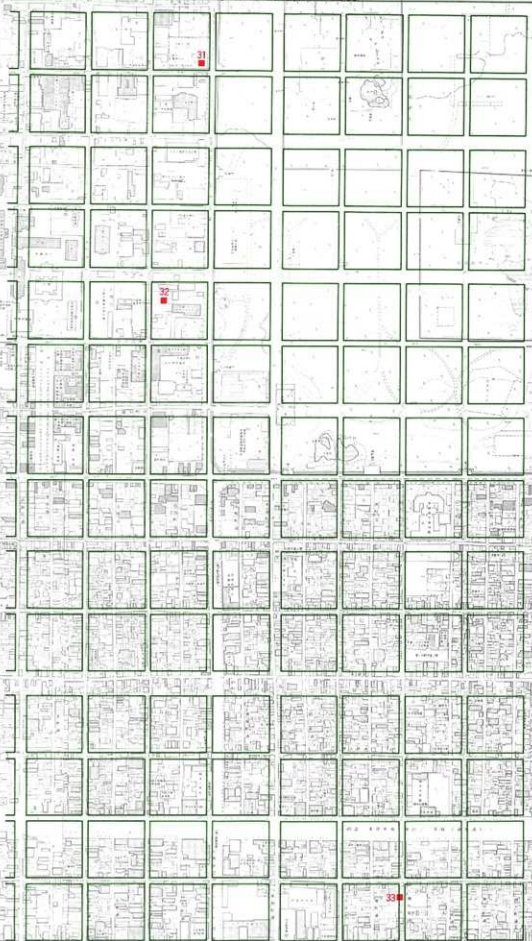
----- 遺跡範囲





平安京左京北辺～三条三・四坊

図版3
一条大路



正親町小路

土御門大路

鷹司小路

近衛大路

筋解由小路

中御門大路

春日小路

大炊御門大路

神泉小路

一条大路

御小路

三条坊門小路

轉小路

一条大路

西洞院大路

町尻小路

室町小路

烏丸小路

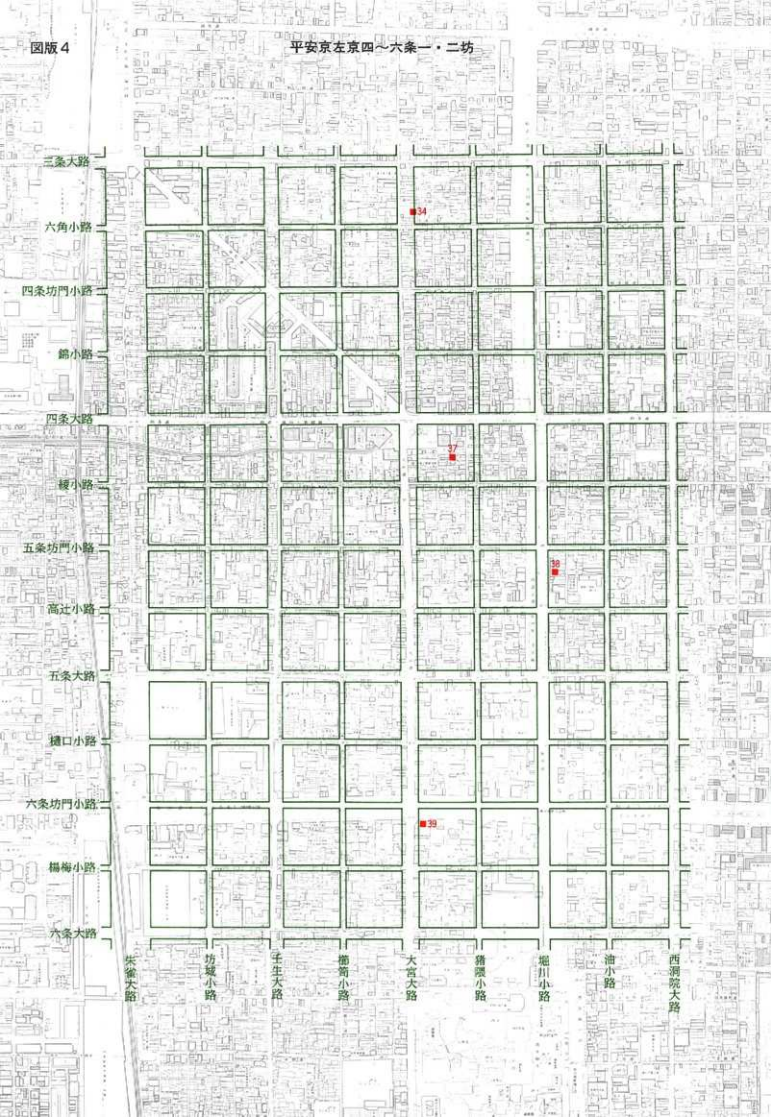
東洞院大路

高倉小路

方里小路

富小路

東洞院大路



三條大路

六角小路

四條坊門小路

錦小路

四條大路

緩小路

五條坊門小路

高辻小路

五條大路

樋口小路

六條坊門小路

梅梅小路

六條大路

朱雀大路

坊屋小路

壬生大路

柳町小路

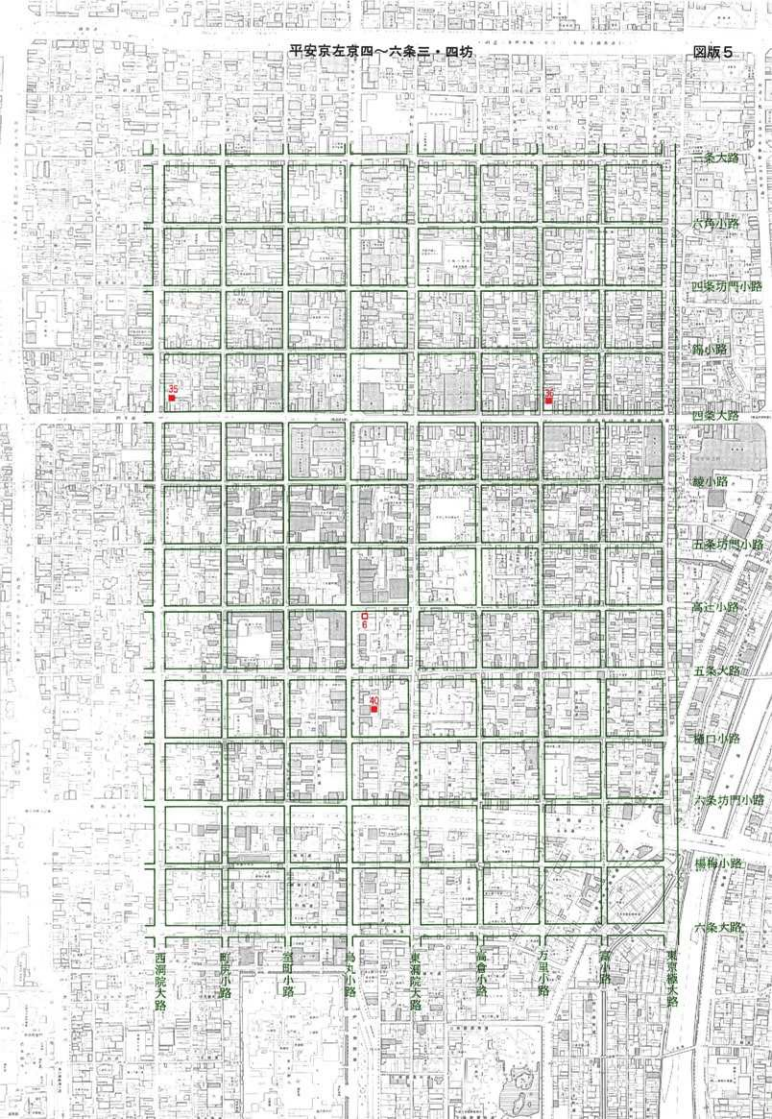
大宮大路

猪俣小路

堀川小路

油小路

西海部大路



東大路

六條小路

四條坊門小路

南小路

四條大路

綾小路

五條坊門小路

高辻小路

五條大路

橋口小路

六條坊門小路

橋梅小路

六條大路

西御院大路

南小路

南小路

南小路

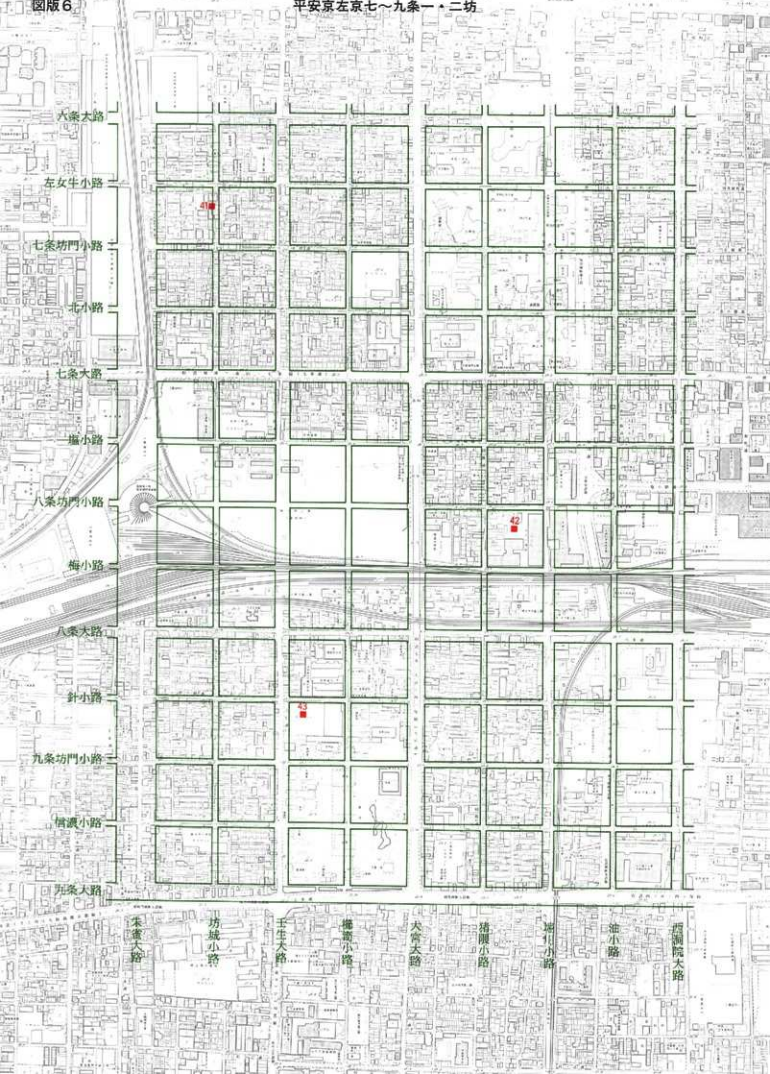
東御院大路

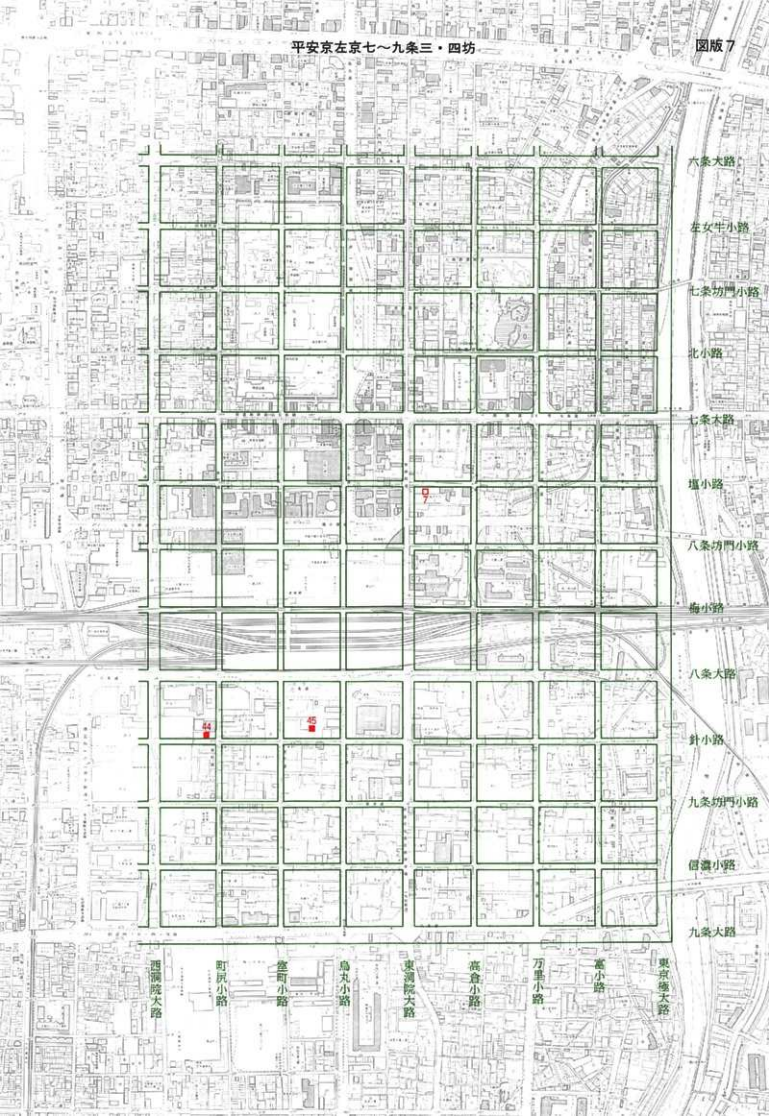
高會小路

万里小路

南小路

東京橋大路





六条大路

左女半小路

七条坊門小路

北小路

七条大路

堀小路

八条坊門小路

梅小路

八条大路

針小路

九条坊門小路

信濃小路

九条大路

西洞院大路

町尻小路

堂町小路

烏丸小路

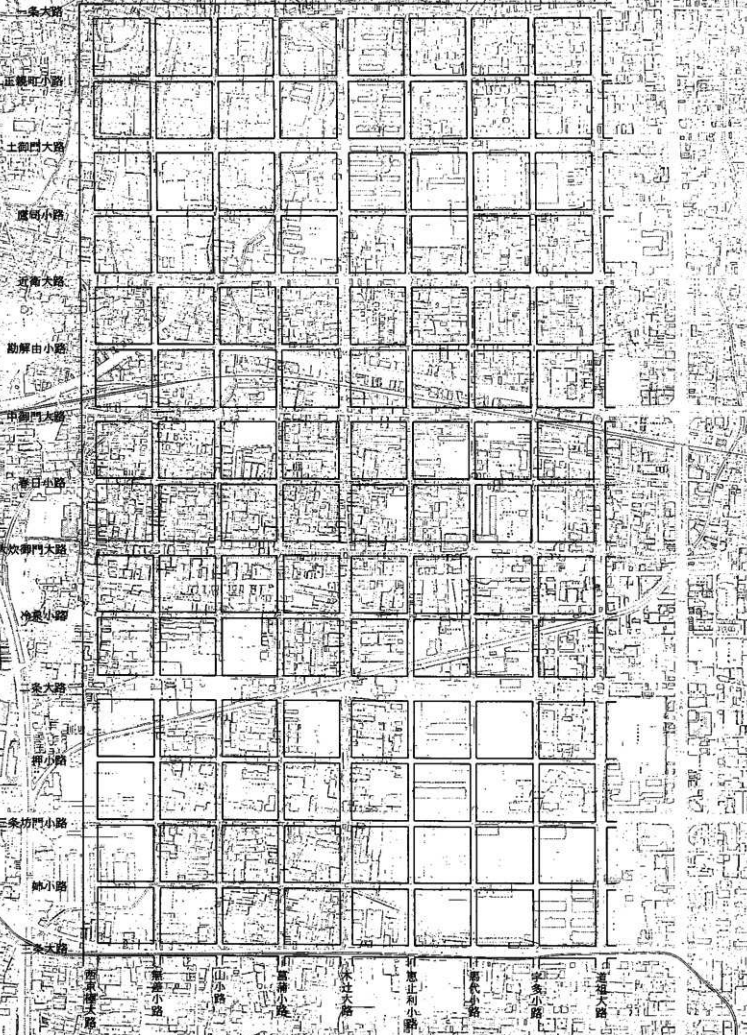
東洞院大路

高倉小路

万葉小路

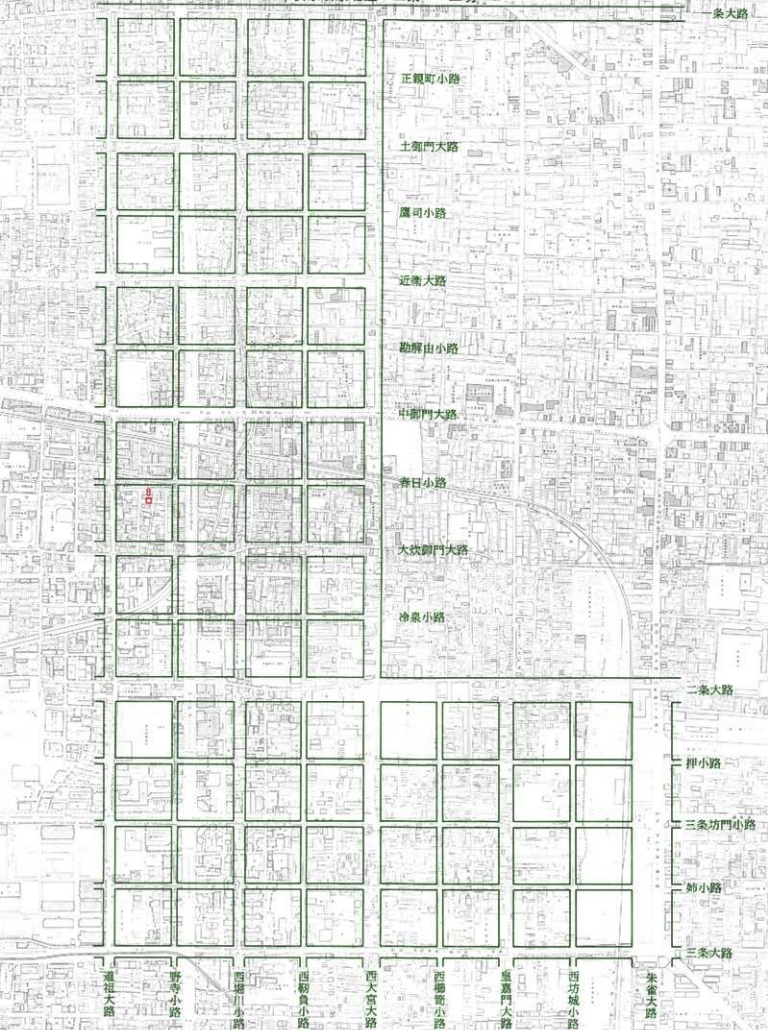
葛小路

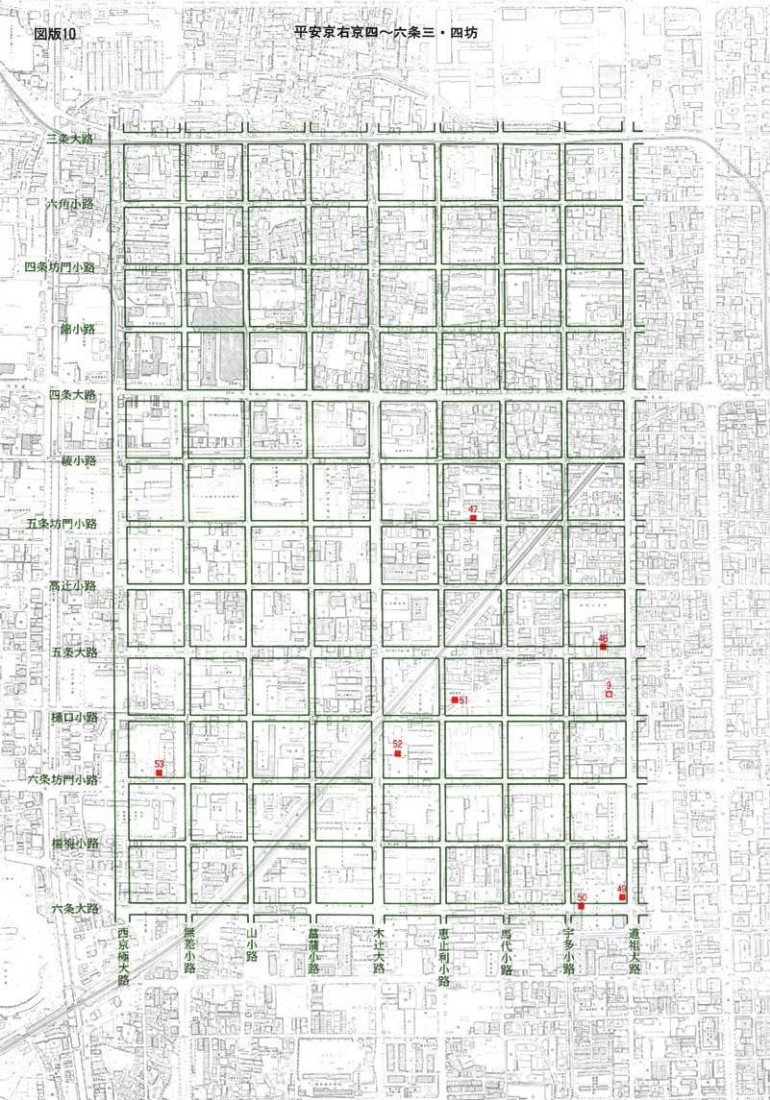
東宮橋大路

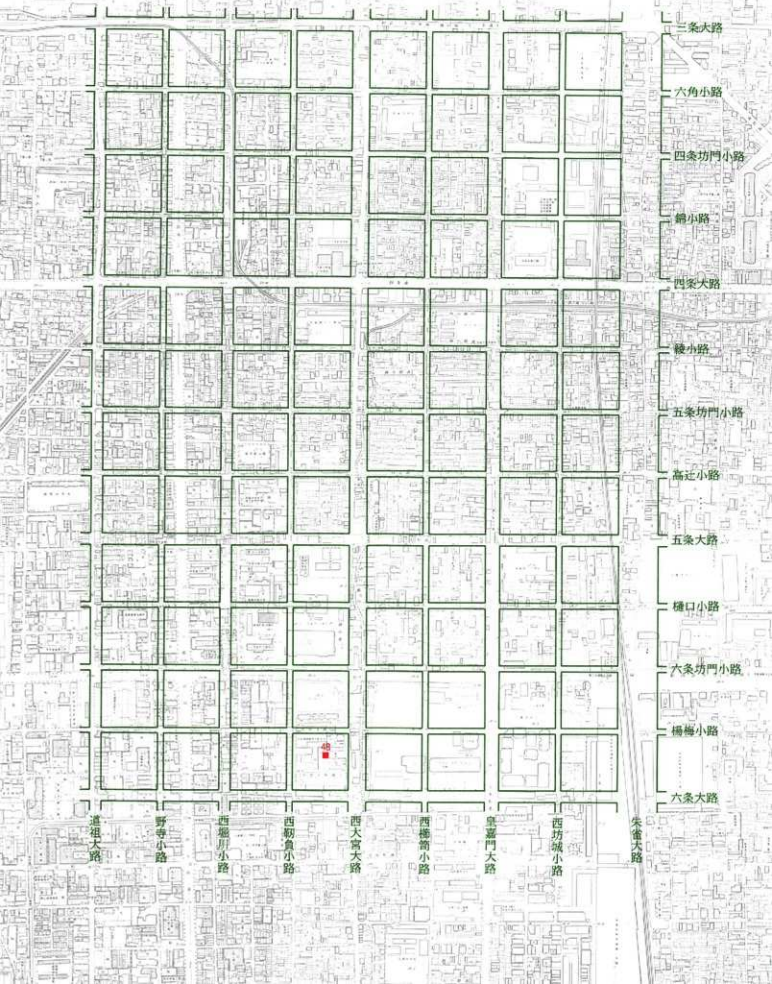


一条大路
 正親町小路
 土御門大路
 鷹司小路
 近衛大路
 勘解由小路
 中御門大路
 春日小路
 大炊御門大路
 冷泉小路
 泉大路
 神小路
 三条坊門小路
 跡小路
 一条大路

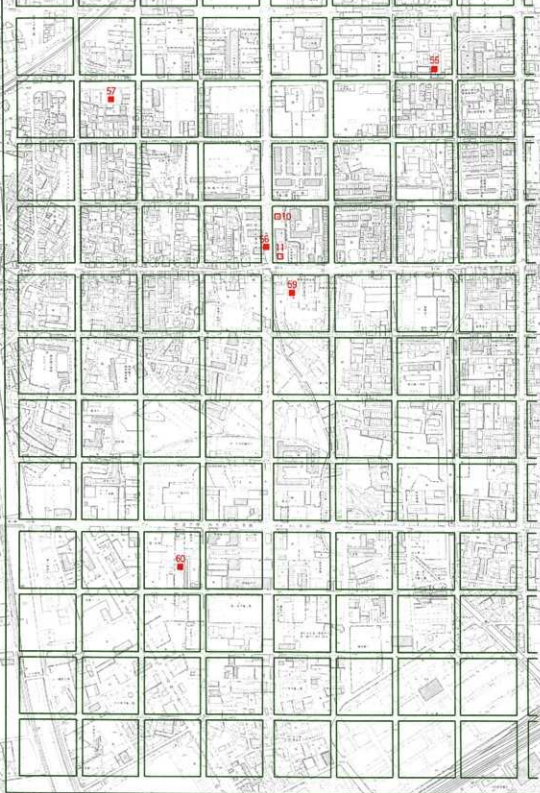
南東御大路
 無名小路
 山小路
 富壽小路
 水江大路
 打惠止利小路
 惠代小路
 字多小路
 通南大路



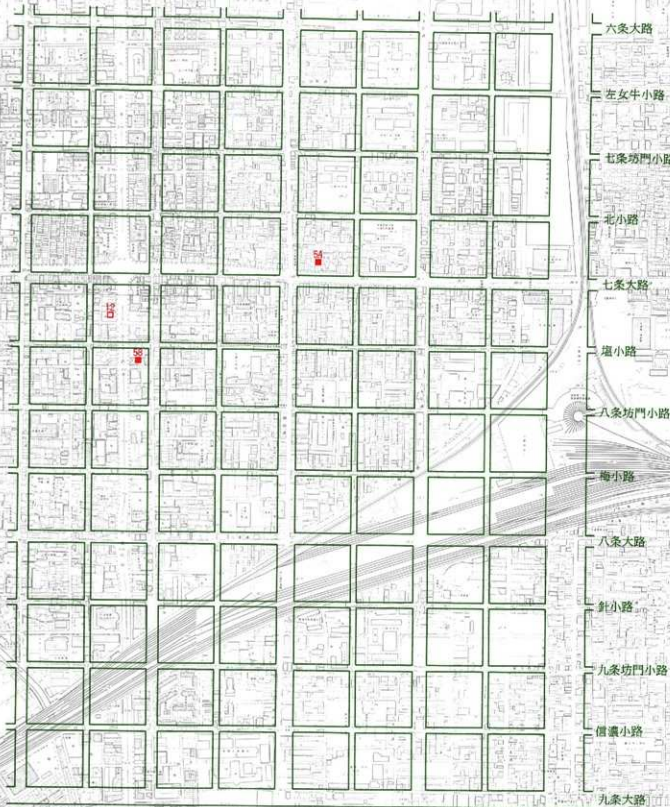




六条大路
左女牛小路
七条坊門小路
北小路
七条大路
堀小路
八条坊門小路
梅小路
八条大路
針小路
九条坊門小路
備濃小路
九条大路



西京極大路
無差小路
山小路
高滿小路
木辻大路
惠止利小路
馬代小路
宇多小路
道祖大路



道祖大路

野寺小路

西堀川小路

西麩負小路

西大宮大路

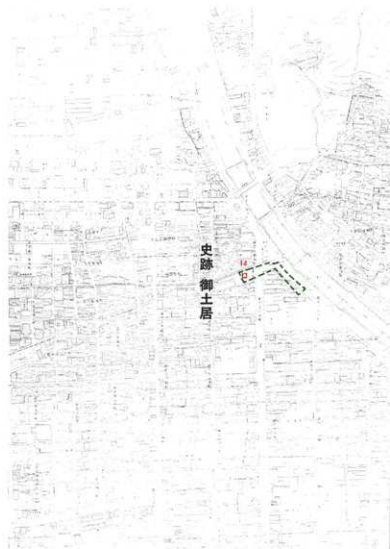
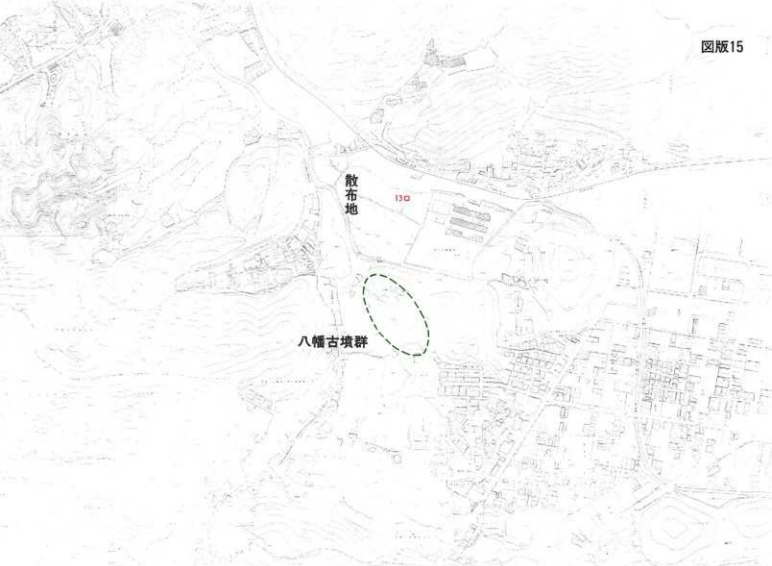
西堀筒小路

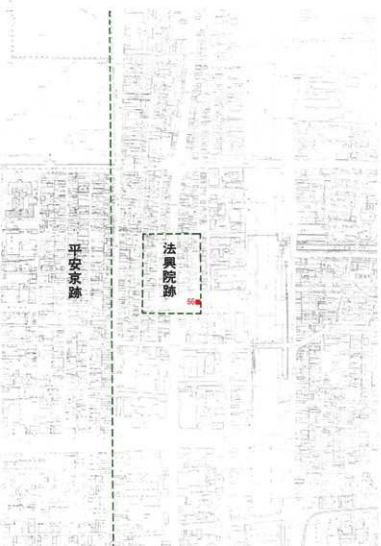
皇嘉門大路

西坊敷小路

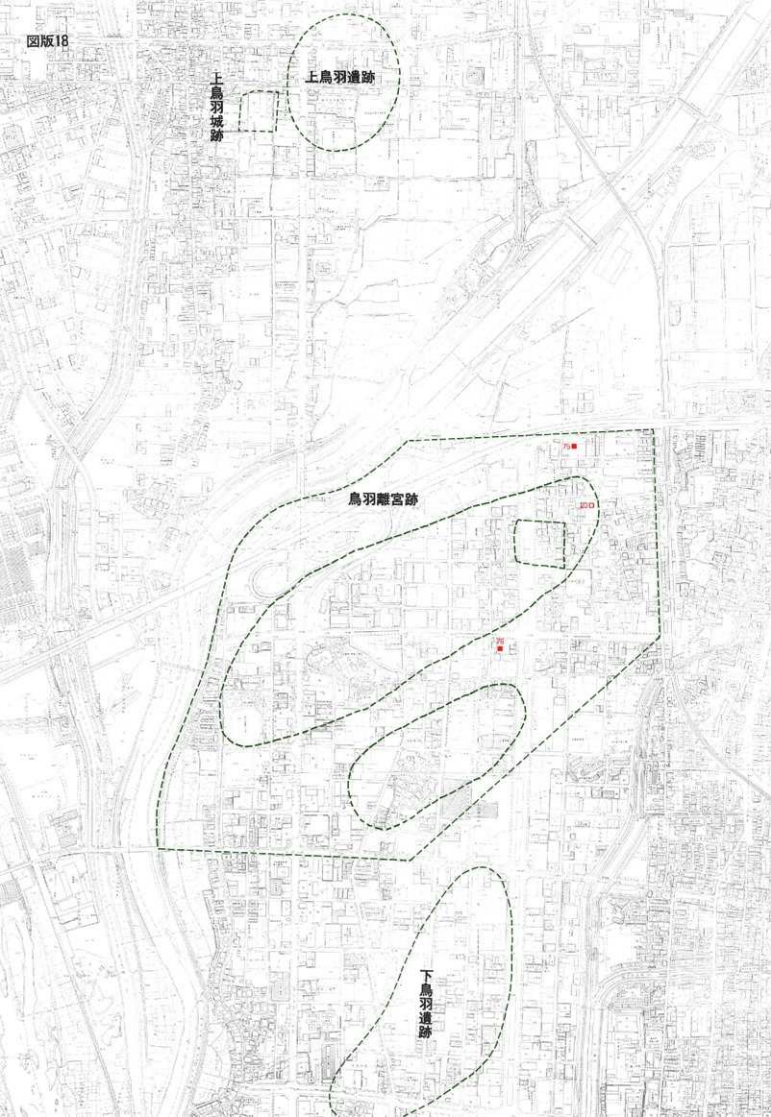
朱雀大路











上鳥羽城跡

上鳥羽遺跡

鳥羽離宮跡

下鳥羽遺跡



長岡京跡

羽東師志水町遺跡

京都市内遺跡試掘調査概報

平成12年度

発行日 2001年3月31日
発行 京都市文化市民局
編集 京都市遺産文化財調査センター
住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265-1
TEL. (075) 441-5261
印刷 株式会社エッグズ TEL. (075) 595-0241